

聖徒の道 12 1983





末日聖徒イエス・キリストの教団

大管長会

- スペンサー・W・キンボール
- マリオン・G・ロムニー
- ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

- エズラ・タフト・ベンソン
- マーク・E・ピーターセン
- ハワード・W・ハンター
- トーマス・S・モンソン
- ボイド・K・バックナー
- マービン・J・アシントン
- ブルース・R・マッコンキー
- L・トム・ベリール
- デビッド・B・ヘイト
- ジェームズ・E・ファウスト
- ニール・A・マックスウェル

顧問

- M・ラッセル・バラード
- ローレン・C・ダン
- レックス・D・ビネガー
- チャールズ・A・ディディエ
- ジョージ・P・リー

編集長

- M・ラッセル・バラード

国際機関誌

- 編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
- 編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
- 子供の頁編集：
ボニー・ソーナーダース
- レイアウト・デザイン：
マイケル・カワサキ

も く じ

1983年クリスマスメッセージ	大管長会	1
神の御子	スペンサー・W・キンボール	2
思いがけない客人	エルシ・ヒンクレー	11
ババリアでの思い出	マーティン・ヒンクレー	12
モルモン経の登場人物とジョセフ・スミス	ロビン・ヒンクレー	14
あの安息日	ジューズ・ヒンクレー	20
エゼキエルの「木」	キース・ヒンクレー	22
啓示	ダレン・ヒンクレー	29
すばらしいおくりもの	大管長会	42
ジョセフ兄弟	大管長会	45
雪の毛布	ドロシー・ヒンクレー	48
ローカルページ	大管長会	52
索引	大管長会	68
モルモネード	大管長会	表3

■表紙：バルトロム・エステバン・ムリョ神「聖徒の道」誌

1983年12月号 聖徒の道 第27巻第12号

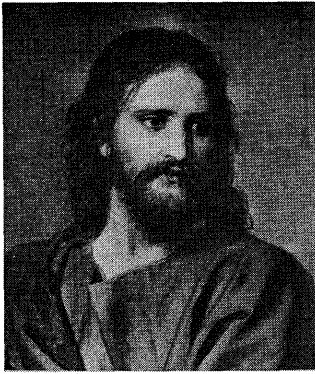
発行所 末日聖徒イエス・キリストの教団
東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料別)
半年予約1,100円(送料共)
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA0642JA Printed in Japan
© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みください。または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリストの教団)で、ボックセンター(振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただきます。送料別郵便で送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急にお知らせのセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いは、ボックセンター150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリストの教団 印刷管理 部渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)



大管長会
1983年
クリスマス
メッセージ

人類の救い主、主イエス・キリストの降誕を喜び祝うクリスマスの季節が再びめぐってきました。この喜びの季節には、救い主誕生の時に天使たちが歌った平和と親しみへの素晴らしい希望が、全地の人々の心の中で新たにされます。

イエス・キリストのくすしき降誕、人の罪のために神聖な犠牲として自ら死を選ばれたこと、人類に永遠の生命を約束する輝かしい復活。私たちはこれらの事柄に対していつも敬虔な思いを抱いていなければなりません、特にこの季節にはその思いが強まります。

私たちの信仰の基は私たちが仕えたいと望んでいる御方、すなわち生けるキリストの上にあります。いつの日か再臨される約束のメシヤ、御子イエス・キリストによって成し遂げられた偉大な贖いのみ業への私たちの感謝の祈りは、永遠の父なる神のみもとへと昇っていきます。

私たちは、「わたしたちを救い得る名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」（使徒4：12）という言葉信じ、世の人々に宣言するものです。イエス・キリストは神の御子であり、全能の御方です。そして、キリストは、若いも若きも、男も女も、すべての人にみもとに来て、完全な者となるよう招いておられます。

この聖なるクリスマスの季節にあたり、私たちは全地の人々に愛を伝えると共に、人類の救い主が説かれた神聖な原則に従うなら、主が与えようとしておられる平和を受けられることができると宣言するものです。

大管長会メッセージ

クリスマスシーズンになると、多くの人の心が主イエス・キリストに向けられます。キリストの輝かしい使命について思いを新たにしてみたいと思います。

神の御子

大管長 スペンサー・W・キンボール

イエスが歩まれた道

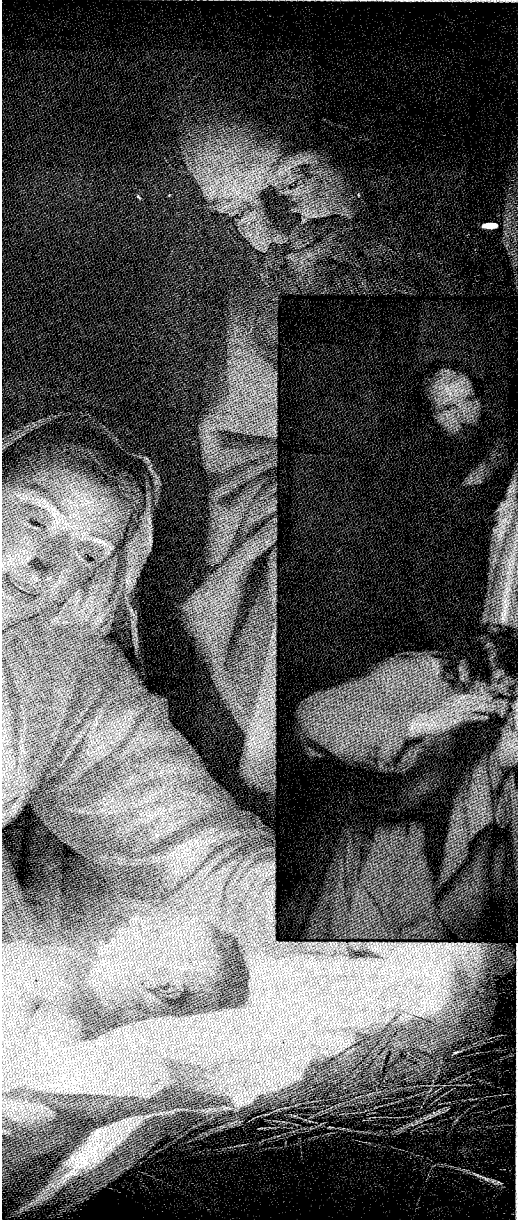
何年か前のあるクリスマスの日に、私たちはイエスが歩まれた道をたどったことがあります。ゲツセマネの園であったと言われている所で私たちはしばらくの間素晴らしい時を過ごし、十字架と復活に先立って主が受けられた苦しみに思いをはせました。

主が祈られた所、投獄された場所、裁判にかけられ、刑を宣告された場所などの跡も訪ねてみました。

私たちは城壁の外にある岩はだのごつごつとした丘を登りました。小さな穴があり、^{ずがいこつ}頭蓋骨のような形をしているその丘は、主が十字架にかけられたゴルゴタの丘であるとのことでした。それから、私たちは、その丘の後ろの方から下りて、切り立った岩場の所に出、主の体を横たえたと言われる荒削りで小さな窓くらい

の大きい岩穴の中に入りました。

この墓の外の小さな園の中で、私たちはしばらく時を過ごし、そこで起きたといわれる主の埋葬と復活の聖書の話を読み、そこへやって来た女性たち、岩を転がした主のみ使い、恐れおののく見張りたちなどのことを、祈りの気持ちをもって、心に深く思いめぐらしました。



●大管長会メッセージ

私たちの目の前に、マリヤに「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」(ルカ24:5-6)と告げた、光り輝く衣のふたりのみ使いが現われるような気持ちがありました。

成し遂げられた主の使命

主は自らこう予告されました。「人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる。」(ルカ24:7)

私たちはマリヤ、み使い、主の間に交わされた言葉を思い起こしました。「彼らはマリヤに、『女よ、なぜ泣いているのか?』と言った。マリヤは彼らに言った、『だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです。』」

うしろを振り向いたマリヤは、「そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。

イエスは女に言われた、『女よなぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。』マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、『もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。』

イエスは彼女に『マリヤよ』と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で『ラボニ』と言った。それは、先生という意味である。

イエスは彼女に言われた、『わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に言って、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わた

しの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と、彼らに伝えなさい。』(ヨハネ20:13-17)

オリブ山

それから私たちはかなり傾斜の急なオリブ山を息を切らせながら登りました。この道はおそらく、昇天の前に主が歩まれた道だと思われます。復活から40日間、主は御自身の復活が真実であると信じていた何百人もの人々に、数多くの確かな証拠によって、確信を与えた後、この道を登っていかれたのです。

オリブ山頂に立たれた主は、心配そうな顔をした弟子たちにごう言われました。「あなたがたは……エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」(使徒1:8)

私たちはオリブの老木のかたわらに座り、これらの聖句を読んだ時に、不安な気持ちでいる愛弟子たちの中に立たれた主の姿を思い浮かべました。やがて霧が立ち込め、山の頂には雲がかかり、主の姿が見えなくなっていきました。そして、白い衣を着たみ使いが現われ、こう言いました。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」(使徒1:11)

それから私たちはエペソ人にあてたパウロの次の言葉について話し合いました。

「そこで、こう言われている、『彼は高い所に上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜を分け与えた。』……

降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にも上られたかたなのである。」(エペ

ヨ4：8、10)

クリスマスの意義

何か特別な行事を祝う時に、その意義が理解されることなく、この世的な色彩ばかりが前に出てしまうことがよくあります。これはクリスマスについても言えることです。この祭日を祝いはしても、主の誕生と復活の深い意義を忘れていた人があまりにも多いように思われます。キリストが神であり、神の御子であることを顧みようとしない人は、本当に不幸せな人と言わざるを得ません。復活という至高の奇跡を、「歴史上の実際の出来事ではなく、弟子たちの内的体験である」とする人々がいますが、非常に残念なことです。

私たちはこれらがすべて真実であることを、確かに知っています。「わたしたちは自分の知っていることを語り、また自分の見たことをあかししているのに、あなたがたはわたしたちのあかしを受け入れない。」(ヨハネ3：11)

また、ペテロの次の証が浮かんできます。「だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである。」(使徒2：36)

「あなたがたは、この聖なる正しいかたを拒んで……

いのちの君を殺してしまった。しかし、神はこのイエスを死人の中から、よみがえらせた。わたしたちは、その事の証人である。」(使徒3：14-15)

ペテロとヨハネは議会で、再び大胆にこう発言しました。

「あなたがたご一同も、またイスラエルの人々全体も、知っていてもらいたい。こ

の人が元気になってみんなの前に立っているのは、ひとえに、あなたがたが十字架につけて殺したのを、神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。……

この人による以外に救はない。わたしたちを救う名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」(使徒4：10、12)

議会で責められ、イエスのみ名によっては一切話しても教えてもならないと命じられた時、このふたりの使徒はこう答えました。

「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。

わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。」(使徒4：19-20)

「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた。」(使徒4：33)

ペテロの証

私たちもまた、復活が実際の出来事であることを知っています。強い信仰を持ったペテロは迫害者たちが顔をつらねる議会でこう言いました。

「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせ、……

わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜った聖霊もまた、その証人である。」(使徒5：30、32)

彼はこれほどまでに完全な改宗をし、指導者としての責任と権能を心から引き受け、靈感と確信に基づく勇気を備えていました。

●大管長会メッセージ

この偉大なペテロのことを思うと、感嘆の声を挙げざるを得ません。聖徒を導き、迫害者、不信者そして数々の困難にあふれるこの世に立ち向かっていった彼の力は実に大きなものです。ペテロは自分の確かな知識を何度も何度も証していますが、私たちは、自分の命を奪うこともできる暴徒、ユダヤ教の指導者、役人たちと対峙し、よみがえりの主、平和の君、聖なる義の御方、命の君、導き手、救い主の存在を大胆に宣言した彼の精神力を誇りに感じます。ペテロは確かに、何ものにも動かされることのない強さを身に付けたのです。私たちが彼の強さから学んで、自らを強く鍛えなければなりません。

ステパノの言葉と証を読んでみましょう。彼の言葉には非常に意義深いものがあります。彼は自らの信仰に命を捧げた、聖なる殉教者です。

ステパノが「天を身つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた。

そこで、彼は『ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える』と言った。」(使徒7:55-56)

殉教者ステパノは永遠の生命を受け継ぐことでしょう。ステパノの証は、イエスは死んではおらず、生きたもう御方であること、また御父と共に昇栄し、栄光化した状態にあることを明らかにしています。

パウロの証

パウロの証はこの上なく決定的なものに思えます。彼は復活したキリストのみ声を聞きました。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」サウロはそれがだれの声であるかを確かめるために、「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねました。すると

次のような返事があったのです。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。あなたにとってとげを蹴るのは辛いことである。」(欽定訳使徒9:4-5)

そして神権者の癒しによって力と視力を回復したこのパウロは、ダマスコのユダヤ人たちの間に姿を現わし、「このイエスがキリストであることを論証して」(使徒9:22) 彼らを言い伏せました。

後にパウロはエルサレムの使徒たちの所へ行きましたが、その時バルナバがパウロに代わって、「途中で主が彼に現れて語りかけたことや、彼がダマスコでイエスの名で大胆に宣傳えた次第を、彼らに説明して聞かせ」(使徒9:27) しました。

パウロ自身は次のように語っています。

「そして、イエスについて書いてあることを、皆なし遂げてから、人々はイエスを木から取りおろして墓に葬った。

しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。

イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている。……

神は、イエスをよみがえらせて、わたしたち子孫にこの約束を、お果しになった。……

また、神がイエスを死人の中からよみがえらせて、いつまでも朽ち果てることのないものとされたことについては、『わたしは、ダビデに約束した確かな聖なる祝福を、あなたがたに授けよう』と言われた。」(使徒13:29-31, 33-34)

マルスの丘での証

アテネのマルスの丘におけるパウロの証は、非常に深い意味を持つものです。ギリ

定めて下さった……

このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのであ

る。」(使徒17:24-26、31)
 パウロは後にも、自分自身の改宗のいき

さつと証を述べ、「わたしは、あなたが迫害

しているナザレ人イエスである」というキ

リストのみ言葉を聞いたと話しました。そ

の見聞きした事につき、すべての人に対して、

彼の証人になるためである」(使徒22:8、

15)との約束を受けたのです。

パウロがアグリッパ王に向けた、的を得

た質問を見てみまし

よう。
 「神が死人をよみ

がえらせるというこ

とが、あなたがたに

は、どうして信じら

れないことと思える

のでしょうか。」(使

徒26:8)

次もパウロの証で

す。
 「わたしは自由な

者ではないか。使徒

ではないか。わたし

は、主にある

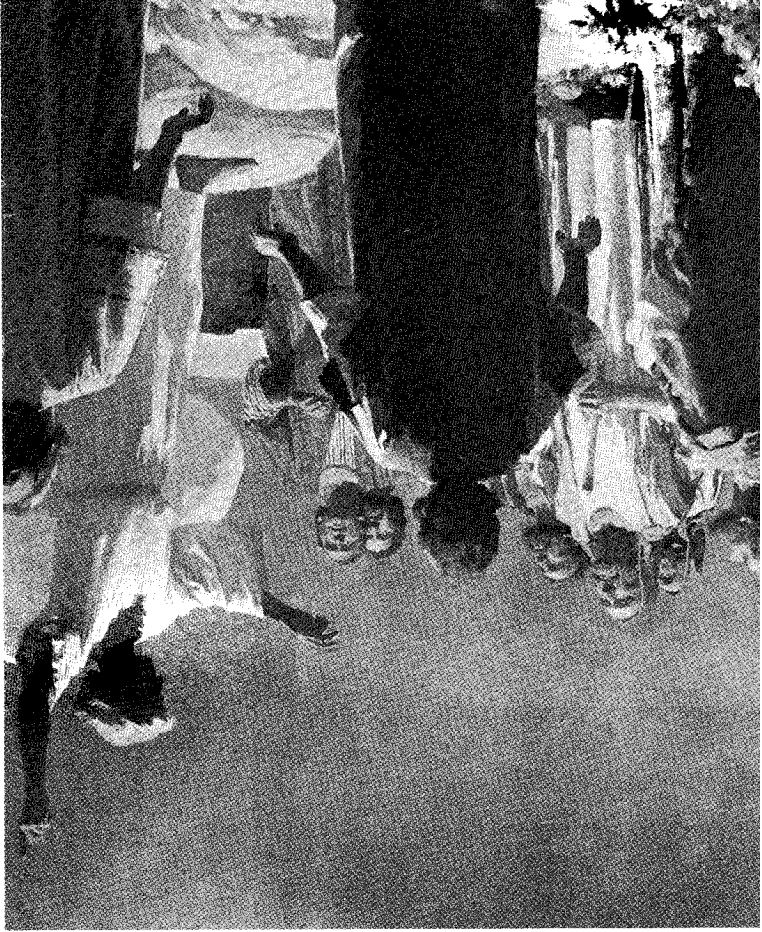
たがたは、主に見

たではないか。わた

しは、主にある

たがたは、主に見

たではないか。わた



とを与え……

……神は、すべての人々に命と息と万物

にはお住みにならない。

地の主であるのだから、手造った宮など

と、その中にある万物とを造った神は、天

神についてこう語っています。「この世界

を知っていないと指摘しました。彼はその

ったあらゆる神々を持っているが、真の神

パウロはこれを用いて、彼らは木や石で作

「知られざる神に」と刻んでいましたが、

受け入れていました。彼らはある祭壇に、

シヤ人たちは神と名の付くすべてのものを

●大管長会メッセージ

百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。……

そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、

そして最後に、いわば、月足らずに生まれたようなわたしにも、現れたのである。」

(Iコリント15：6-8)

パウロは死者の復活についても、素晴らしい書簡を残しています。コリント人にあてた手紙がそれです。

私は使徒として共に働く兄弟パウロを心からたたえ、愛するものです。彼の献身、謙遜さ、正直さは心からのものでした。そして、非常に熱心で、人々に関心を持っていた人物でした。パウロにも自分なりの問題があったでしょうが、親しみ深い人物であったことは確かだだと思います。彼がある地を去ろうとした時に、そこの人々から強く引き止められたという話がそのことを証しているのではないのでしょうか。

私はパウロを愛しています。なぜなら、彼は真理を説いたからです。彼は人々に関心を向けていました。私は死に至るまで不動の信仰を守り、神の教えに殉じたパウロを愛しています。私は、パウロが教会員や世の人々に福音を教えようとして体験した数々の苦難の物語を読む時、いつも心に強く迫るものを感じます。

目撃者の証言

おそらくペテロの書簡の最後のひとつは、当時すでに福音に改宗していた人と、その後彼の言葉の影響によって改宗に至った人の両方に向けられたものであったと思います。その言葉はあらゆる時代の人々が心にとどめるべきものです。

この偉大な予言者は死を目前にし、肉の幕屋を脱ぎ捨てて次の世に移っていく時がそう遠くないことを知った時、次の時代の

人々に伝えようと、自分の証を書く決心をしました。そしてその手紙は、数多くの人人が読み、耳にしてきました。ペテロは次のように書いています。

「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。



イエスは父なる神からほまれと栄光をお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。』

わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。」(IIペテロ1:16-18)

ジョセフ・スミスの証

近代の予言者ジョセフ・スミスも復活について、人々に再確認をしています。その証は私たちの霊を鼓舞するものです。ジョージ・A・スミス長老は、ジョセフ・スミスが1844年6月、暗殺される数日前に行なった最後の説教からこのように引用しています。

「私はすでにこの民のための犠牲として捧げられる心構えができています。敵に一切何ができるだろうか。肉体を死に至らしめるだけである。彼らの力をもってしてはそれが限界である。友よ固く立っていただきたい。ひるんではならない。自分の命を救おうとは思わないで欲しい。真理のために死ぬことを恐れる者は、永遠の生命にあずかることができないからである。最後まで頑張りなさい。そうすれば、私たちは復活して神に似た者となり、日の光栄の王国の王権、公権、そして永遠の支配権を授けられるのである。」(History of the Church, 6: 500)

復活の真実性

復活の真実性は、キリスト教世界の数多くの人が信じています。フランスの詩人ピクトル・ユーゴーは次のように書いています。

「私はもともと来世というものを信じて

いる。私には死の時が近づくにつれて、自分の周りに、私を招いている世界の永遠の交響曲がよりはっきりと聞こえてくる。私は墓に下る時、多くの人と同じように、『この世での仕事を終えた』と言うかもしれない。しかし、『自分の命はこれで終わった』とは言わないだろう。私の仕事はその次の日の朝から始まるのである。墓は行き止まりの袋小路ではない。それは開け放たれた道なのである。それは夕べに閉じ、朝に開く。」(from the poem, "A Villequier")

ある無名の作家は、言葉では説明し切れない不死不滅へのあこがれという自然な情感を次のように表現しています。

不死不滅への憧憬

「この喜ばしい望み、この甘美な思いは他のどこからくるのだろうか、

この隠れた不安、死をもって命が絶えるという内なる恐怖はどこからくるのだろうか、

死を思つて、ひるみ、度を失うのはなぜだろうか、

人の心を揺さぶるのは神、

来世を指し示すのは神ご自身、

神は人に魂の不滅をささやく。」

ヨブの疑問と答え

次のヨブの疑問は、愛する人の棺を前にした多くの人が心の中で繰り返してきたものです。

「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。」(ヨブ14:14)

そしてこの問いかけに対して、多くの人が喜ばしい答えを受けてきました。大きな安らぎが天の露のように注がれたのです。そして、苦しみに疲れ果てた無数の人が、人知を越えた平安を味わってきました。

大いなる安らぎが、悩み悲しむ多くの人

●大管長会メッセージ

の心に新たに温かな確信をもたらす時、その人々はヨブと共にこう言うのです。

「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、

末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を滅したのち、わたしは肉にあって神を見るであろう。

しかもわたしのこの目で見るとであろう。」

(欽定訳ヨブ19:25-27)

ヨブは自分の証が書物に記され、岩に刻みつけられて、後の代の人々に読まれるようにと望みました。そして、多くの人々がその強い証を読んで心に安らぎを受け、ヨブの願いは聞きとどけられてきました。

ヨハネが受けた示現

最後に、黙示者ヨハネが受けた示現を見たいと思います。

「また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かざかざの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがってさばかれた。

海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。」(黙示20:12-13)

陰うつで、死んだような冬の後に、生氣と緑にあふれた春が来ると、自然界のすべてのものが、よみがえりの主の神性を歌いあげます。クリスマスの季節を迎え、キリストが創造主、世の救い主、そして神の御子であることを、もう一度心に思い起こそうではありませんか。

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングの時、以下の点を強調するとよい。

1. 主は御自身が「罪人らの手に渡され」、十字架につけられた後、復活すると予言しておられた。それは永遠の計画の一部であった。
2. ペテロを初めとする使徒たちは、命をかけて、救い主とその復活を証した。
3. 現代の予言者たちも復活の真実性を証してきた。ジョセフ・スミスは、「真理のために死ぬことを恐れる者は、永遠の生命にあずかることができない」、また、最後まで忠実であるなら、「復活して神に似た者と」と語っている。
4. 人の命はこの世限りのものではないと信じている人は、この教会の会員以外にもいる。作家ビクトル・ユーゴーは、「墓は行き止まりの袋小路ではない。それは開け放たれた道なのである」と書いている。

話し合いのための提案

1. 使徒たちの信仰と、復活の真実性を証したいという強い気持ちについて、自分が感じていることを話す。
2. このメッセージの中に、家庭で読んだり、話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。この主題に関連して、定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

思いがけない客人

エルシー・メイ・ロック

月曜日は洗たくの日でしたが、クリスマスを翌日に控えたその日、私の頭の中はクリスマスにぜひしたいと思っていたテーブルの飾りつけのことで一杯でした。ほかのことはさておき、とにかく飾りつけに必要なものを買に行かなくてはという気になりました。

道路を横切って、バス停に向かおうと思いましたが、急に気が変わり、歩いて行くことにしました。3分の2ほど来た時です。ふと見ると、モーター付きの車椅子に乗ったひとりの婦人がいました。その人は教会員ではありませんでしたが、私は彼女のことを知っていました。ワード部で毎年、市内の年輩の方のために音楽会を開いているのですが、その折に代表として感謝の言葉を述べて下さったのが、この婦人でした。

私は彼女に言葉をかけました。少しおしゃべりしているうちに、彼女が独りぼっちのさみしいクリスマスを迎えようとしていることに気づきました。その日の朝、洗たくもせずに外出しなさいと促されたのは、このためだったのかと私はつくづく思いました。そして彼女を我が家のクリスマスに招待しました。外出の目的が果たされた今、飾りつけの買物など、もうどうでもいいことでしたが、とにかく買おうと先を急ぎました。

しばらくして、私ははっとしました。招待している人がほかにもいたのです。どうしよう……私は頭をかかえてしまいました。教会員ではない夫は何と言うだろう。親戚が6人来ることになっているし……（その中には年寄りも子供もいる）そして我が家

の家族が4人。みんな何と言うだろう……

最初、夫はこの件について絶対反対でした。夫が言うには、クリスマスは家族だんらんのひとつだから、話をしたこともない人を招くのはどうかなのというのです。でも私は、彼女と会ったのはみたまの導きによるものだと感じていましたから、断食して祈り、訪問教師にも祈ってくれるように頼みました。するとどうでしょう……その翌日には陽気な笑いが我が家に戻ってきて、みんなこの特別なお客様を快く迎えてくれたのです。


私たちは一緒に楽しいクリスマスのひと時を過ごしました。彼女は、救い主に対する証と和やかな雰囲気を我が家に運んでくれました。彼女が教会員ではない私の親戚の者に、キリストの再臨について彼女なりの証をしてくれたので、私は彼女の証に添えて自分の証を述べました。お陰で、彼らに福音についてもっと多くのことを説明することができました。思いがけないお客様が道を備えて下さったのです。

*エルシー・M・ロック姉妹は、現在英国サリー州のミッチャムワード部で音楽指揮者、初等協会教師として働いている。4児の母。



ババリアでの思い出

マーガレット・O・テイトン



父が言い出したことに、私は多少のいらだちを覚えていました。クリスマスイブに家族でキャロリングに出かけるのは、長年の間、我が家のしきたりになっていたからです。それは、家族で何とかコーラスらしいコーラスができるようになってから、ずっと続けていたしきたりで、周りの人たちへの愛を込めたあいさつでもありました。ところが、その時のクリスマスイブばかりは、父はどうしてもキャロリングには行きたがらず、代わりに、教会の墓地へ行くこうと言いだしたのです。

その年、私たちは、アルプスに囲まれたドイツ南部のババリア地方に住んでいました。私たち家族は言葉を学ん

で、その地方の生活習慣やしきたりになじもうと努めました。よく、あちこちの小さな村や地元の人の家を尋ねたり、昔からの観光コースをはずれた、おもしろそうな場所に行ってみたりしたものです。ですから、教会の墓地へ行ってみようという提案も、それがクリスマスイブのことでなければ、なにもそう変に感ずることはなかったのです。

私たちはふ厚いコートと暖かいえり巻きに身を包み、村の教会の墓地へ続く曲がりくねった細い道を登って行きました。私たちはシャレー（長いひさしの付いた、ババリア地方やオーストリア、スイス独特の家）とそれに棟続きの畜舎は何度も見ていましたが、その晩は、そうした建物が、いかにもクリスマスの季節にふさわしい雰囲気を漂わせているように見えました。それは、旅人が家畜小屋に宿を取った、あの最初のクリスマスを思い出させました。丘の頂上まで登りつめると、屋根に尖塔を付けた教会の中から、静かな音楽が聞こえてきました。私たちは、教会の脇を通って、その裏にある墓地に入って行きました。そこにはすでに何組かの家族がいましたが、辺りは静まりかえって、敬虔な雰囲気が漂っていました。私たちは別の世界にいるような気持ちを感じながら、周囲を見渡しました。

どの墓の上にも、クリスマスを記念する品々が置かれていました。美しい花輪、火のついたロウソク、生けたばかりの花束、明かりが点滅する小型のクリスマスツリーなどがあり、中にはキリスト降誕の情景を描いた彫り物まで置いてある墓もありました。それらは、亡くなった愛する家族と共にクリスマスを祝いたいという村人たちの願いの表われでした。彼らは亡くなった家族のことを心に強く思い、それらの品を墓地まで運んできたのです。

私たちは家族だけの神聖なひとときに立ち入ってしまったような気持ちを覚え、雪を踏みぬながら、黙ってその場を立ち去りました。

翌年、美しいユタ溪谷の冬の中で過ごすことになった私にとって、そのクリスマスイブの出来事は、一層意味のあるものとなりました。父が前の年に亡くなったために、だれひとり、家族の習わしだったはずのキャロリングをしようと言いだす者が、いませんでした。父を失った悲しみが家族の中にまだ残っていたからです。そこで、母は私たち子供を集めて、あの墓地のある国へ、ふたたび旅立ちました。私たちは花輪を持って行きました。今度は、私たち家族の他には、だれもいませんでした。人けのないその場所で、私たちは聖歌を歌いながら、父の墓の上に花輪を置きました。辺りには深い霧が立ち込め、私たちを神秘的な静けさの中に包み込んでいました。霧のせいで、墓地の境から先はよく見えず、世界がそこで終わっているかのようでした。

しかし、自分たちがクリスマスを祝っていることを思い起こしていた時、大きな喜びが私たちの胸を満たしました。救い主の恵みによって、この世にはそれまではなかった新たな希望がもたらされ、肉体の死をもって人の命の終わりだと宣告されることがなくなりました。父も決してひとり寂しい状態にいるのではないのです。共同墓地のその場所で、私たちは父の面影をしのびながら、人を救い、希望を与え、贖って下さった御方の誕生を祝いました。その平和の教えは、私たちの悲しみを癒す大きな慰めでした。

クリスマスイブのこれらの出来事や思いで、そして、それによって深められた救い主に対する感謝の念に、私は心からの喜びを感じています。

胸 ポケットから眼鏡を取り出そうとするジョセフ・スミス・シニアのしぐさは、スミス家の人たちに、夕べの礼拝の時間が来たことを知らせるひとつの合図であった。スミス家では毎日を、歌と祈りと聖書の朗読で終えるのが習慣になっていた。指揮を取り、聖書から読み、祈るのは父親の役割であった。しかし、予言者の母の言葉によると、少年予言者ジョセフが1823年9月に初めてモロナイの訪れを受けて間もなく、この家族の集いには、それまでなか

った面が出てくるようになってきたということである。彼女はこう書いている。

「この時以来、ジョセフは引き続き主から指示を受けており、私たちはその話を聞くために毎晩子供たちを集めました。家族はかつて地上に生を受けただれにも劣らぬ敬意をジョセフに示していたと思います。父、母、息子、娘たち全員が輪になって座り、……18歳の少年に全神経を傾けたのです。……

夕方のだんらんでジョセフは時々非常におもしろい話をしました。この大陸の住民について、彼らの服装や旅行の方法、彼らが乗った動物、あるいは町、建物について細かな描写をしました。また戦争の仕方や宗教生活についても話しました。あの子はこれをいとも容易に、これまでずっと彼らの中で育ってきたかのように話すのでした。」



これらの詳細な描写がなされたのは、モロナイの最初の訪れから、ジョセフが金版を手にするのを許されるまでの4年の間のことである。ジョセフはその知識をどこから得たのだろうか。残念ながら、彼が残した記録から分かっているのは次のことだけである。

「まる一年目毎ごとにそこへ行くと、その度毎に同じ使者がそこに居おりたもうた。そして合う度毎に主が為なそうとしておりたもう事がらや、神の王国がどうして、またどんな風にこの末の世においてこれから指導さ

れて行くかに就いて、使者から指示や通知を受けた。」(History of the Church, 1:16)

後になっても、ジョセフは古代のアメリカの事柄について語ることをあまりしていない。(see History of the Church, 1:220) そのまれな例外が、ジョン・ウェントワースにあてた書簡の中に見られる。

「私はこの地の現住民についても、彼らは何者であるのか、またどこから来たのかなどの知識を与えられた。彼らの起源、進歩、文化、法律、政治、善き行ないと悪しき行ない、また彼らが一個の民としては最

モルモン経の登場人物と ジョセフ・スミス

ロバート・J・ウッドフォード



終的には神の祝福を取り上げられてしまったことなどについて、概略を知らされたのである。そして、この大陸に存在した古代の予言者たちの記録の抄録を刻んだ版がある所も教えられた。天使が一夜の内に3度現われ、同じことを語った。神の天使たちの訪れを何度も受けて、終わりの日に起こる数々の出来事の栄光と威厳について耳にした後、紀元1827年9月22日の朝、私は主のみ使いからその記録を渡された。」

(*Times and Seasons*, 1 Mar. 1842)

このように、最初に予言者ジョセフに教えを施したのはモロナイだったが、版を受ける前に、多くの天使がほかにも様々な事柄を教えていたのである。(see *Journal of Discourses*, 14 :140)

後年、オルソン・ブラットは、ジョセフが顔と顔を会わせて語ったこれらの天使がモルモン経に登場する人物であると語っている。(see *Journal of Discourses*, 13 :66) ブラット長老はさらに、その天使たちが訪れたのは、ジョセフがなすべきことになっていた業に関して指示を与えるためであったこと、またモロナイが彼に「多くの教え」を与えていたことを告げている。

ジョセフ・スミスに親しく接していた人人で、興味ある事柄を詳細に述べた人はほかにもいる。ウィルフォード・ウッドラフは、ジョセフは「天からのみ使い、神の声、聖霊からの靈感と力」によって教えを受けたと書いている。(see *Journal of Discourses*, 16 :35)

オルソン・スペンサーは、「ジョセフ・スミスがひと度口を開くと、古代の予言者たちが生き生きとした姿で描写される」と書

いている。

当然のことながら、モルモン経回復の鍵を持っていたモロナイは、この準備の時期における最も重要な存在である。(教義と聖約27：5参照) 少なくとも22回に及ぶ顕現の中で、モロナイはこの若き予言者と共にみ業を進めた。1823年9月21日から22日にかけての夜の3度の訪問、また、その翌日ジョセフが畑から家に帰ろうとしていた時の現われ、そして、ジョセフがクモラの丘で最初に版を目にした日や、1824、1825、1826年の9月22日にクモラの丘へ戻った時の3度の現われ、さらに、1827年夏の訪れなどがある。ジョセフはある時父親から仕事上の用向きを与えられて出かけたが、疲れ切ったその夜の帰り道の出来事をこう書いている。

「版が埋めてあるクモラの丘の近くを通りかかると、その天使が現われ、私の主のみ業に対する献身が不十分であること、その記録が現わされる時が来ていること、また、大いに励み、神から命ぜられた事柄に備えをしなければならぬことなどを告げました。」(Lucy Mack Smith, *Biographical Sketches of Joseph Smith*, pp.98-99)

10度目の訪れは、ジョセフが版を渡された1827年9月22日のことであった。その翌年の夏、天使モロナイは予言者から金版、ウリムとトミムを取り上げた。予言者はそのことについてこう書いている。「マーテン・ハリスにその記録を借りる特権を与えたまえと願って主を煩わせた結果である。マーテン・ハリスは約束を違えて、記録を無くしてしまった。」(*History of the Church*, 1 :21-22)

後にモロナイは再びジョセフに現われ、(12回目の訪れ) ウリムとトミムを渡した。ジョセフ・スミスはこのウリムとトミムを通して、教義と聖約3章の啓示を受け、その中で自己の不注意を叱責された。モロナイはこの後、再度ウリムとトミムを取り上げたが、しばらくして、翻訳を続行させるために、金版と共にジョセフに返した。

(*History of the Church*, 1: 23)

ルーシー・マック・スミスの記録によると、14回目の訪れは1828年9月22日のこととなっている。

デビッド・ホイットマーは1878年に、その後の3回の訪れ(15~17回目)についてジョセフ・F・スミスとオルソン・プラットに語っている。彼がオリヴァ・カウドリ、ジョセフ・スミスと連れ立って、翻訳の仕事を完成させるために、ニューヨーク州フェイヤットに旅していた時のことである。この時、「とても感じがよくあいきょうのある老人が突然我々の馬車の近くに現われ、額を手でぬぐいながら、『おはよう、とても暑い日だね』とあいさつをしてきました。私たちもあいさつを返しました。そして、私はジョセフの合図を受けて、もし進む方向が同じなら、一緒に馬車に乗って行かないかと誘いました。しかし彼はとても快活に、『どうも有難う。でも私はクモラへ行くのです』と答えてきました。それは聞いたこともない名前でしたし、クモラという名前も分かりませんでした。我々は皆彼に視線を向け、またお互いに顔を見合わせました。私がげげんな顔をしながらジョセフの方を向くと、その老人はたちまち見えなくなってしまっ、二度と姿を現わしません

でした。

ジョセフ・F・スミス：どういう外見の人でしたか。

デビッド・ホイットマー：そうですね。身長は……5フィート8インチから9インチくらい(約175センチ)……茶色の毛織の服を着ていました。……髪もひげも真っ白でした。それと、本のような形をした物を入れた荷物がかついでいましたね。

それは金版を持ち、ハーモニーを出発する直前にそれらの版をジョセフから取り上げた天使だったのです。家に着くと間もなく、私は、それらの版は父の納屋の中に隠されているに違いないと何か強く感ずるものがありました。ジョセフにその推測が正しいかどうかを率直に聞いてみたところ、その通りだという返事でした。」(*Minutes of the School of the Prophets, Salt Lake Stake*, 3 Oct. 1883)

翻訳が完成すると、ジョセフは版をモロナイに返したが、後にモロナイはそれをジョセフ、オリヴァ・カウドリ、デビッド・ホイットマーに見せ、さらにその日遅くマーテン・ハリスとジョセフ・スミスに見せるためにそれを戻したのであった。

記録にある最後の2度の顕現は、ジョセフがモロナイから版を受け取って、八人の見証者に見せた時である。その後、版はモロナイに返された。以上が知られている限りの、22回に及ぶモロナイの訪れである。

救い主の訪れはモルモン経の主要テーマであるが、ジョセフに対しては、モロナイだけでなく、救い主御自身もみ姿を現わしておられる。最初の示現、教義と聖約76章の啓示、カートランド神殿において示現が

開かれた時などがそうである。(ジョセフ・スミス 1 : 14-20; 教義と聖約 76 : 19-24; 110 : 1-10)

救い主の訪れについては、このほかにも教会初期の記録者たちが伝えているものがある。例えば、ゼベディー・コルトリンは、ジョン・テイラー大管長など教会幹部が出ていたソルトレークステーキ部の予言者の塾で、オハイオ州カートランドで最初の予言者の塾が組織された2、3週後のある集會に、救い主がそのみ姿を示されたと言っている。救い主は何も語らずに、その部屋を通り抜けられたが、ジョセフ・スミスはその聖なる訪問者がだれであるかを確認したという。「あの御方は神の御子、我らの長兄、イエスである。」

モルモン経に登場する人物の中には、その出版に関連して、ジョセフ・スミスのもとを訪ねている者がいる。例えば、パーレー・P・プラットはこう書いている。

「あの青年と、彼に与えられた聖なる天使たちの導きによって、この本は世に出た。」(*Journal of Discourses*, 9 : 212)

ジョセフ・スミスが、かつてニーファイ人として現世を過ごしたことのある天使たちから導きを受けていたことは明らかである。

ジョージ・Q・キャンノン長老はこれらの天使として、アルマ、ニーファイのふたりを挙げるができるだろうと言っている。

(*Journal of Discourses*, 13 : 47) 後年の説教の中でキャンノン長老は、ジョセフはモロナイや様々な神権時代の指導者たちの訪れを受けたが、それはジョセフ・スミスが、「神に属ける事柄についての知識を豊かに

受け、神から授けられた偉大で神聖な召しを理解する」ようにするためであったと言っている。(*Journal of Discourses*, 23 : 362)

さらに、ジョン・テイラーは次のような言葉を残している。

「彼〔ジョセフ・スミス〕は時折与えられた天との交わりを通して、末日に起こる数々の大いなる出来事を学んだ。彼は過去の事柄を知り、数ある神権時代とその目的とを理解していた。彼は数々の原則を明らかにするにとどまらず、それらの神権時代において指導者として働いた人々とも親しく交わっていた。そして、彼はそれら数多



くの人々から、末日に主の大義を押し進めるための権能、鍵、神権、権威を授けられたのである。その使者たちは彼にこれらの鍵と権能を付与するために、特に、全能者から命じられ、遣わされたのである。」

(*Journal of Discourses*, 20 : 174-75)

ジョン・テイラー長老も、ジョセフ・スミスを訪れた使者として、「モルモン、モロナイ、ニーファイ、そして、昔この大陸に住んでいた他の古代の予言者たち」を挙げている。(*Journal of Discourses* 17 : 374)

テイラー長老は1879年にユタ州エフライムで、ニーファイ人の12人の弟子たちもまたジョセフのもとを訪ねていると語った。

「ジョセフ・スミスが自らのものとして身につけていた原則は、主との交流によって彼に与えられたものであった。またそれは、主だけでなく、古代の使徒や予言者たちとの交流によっても与えられた。例えば、アブラハムやイサク、ヤコブ、ノア、アダム、セツ、エノク、それにイエスと御父である。また、アジア大陸に住んでいた使徒たちだけでなく、この大陸に住んでいた使徒たちとも交流があった。」(*Journal of Discourses*, 21 : 94)

テイラー長老は後に、ソルトレーク・シティーの第14ワード部での話の中で、次のようにも語っている。

「天使モロナイが彼を訪れ、モルモン経のことを明らかにした。……その後、古代の予言者のひとりニーファイが来た。彼は、その昔この大陸に住み、当時の民の幸福に心をかけていた人物である。……

もう一度言うが、主の福音を代表する者として再び働きを進めるという点において、

モロナイやニーファイ、またかつて同じ福音の力のもとに、この大陸の民に導きを与えた幾人かの予言者たちほどに適切な人がほかにいるだろうか。」(*Journal of Discourses*, 21 : 161, 163)

オルソン・プラット長老はユタ州のブリガム・シティーのジョン・クリステンセンにあてた個人的な書簡の中で、次のように述べている。

「予言者はニーファイ、モロナイ、ペテロ、ヤコブ、愛弟子ヨハネ、バプテスマのヨハネ、エライジャ、モーセ、三人のニーファイ人などの訪れをよく受けていた。」

確かに、ジョセフ・スミスの予言者としての働き、モルモン経の翻訳は、義人が待ち望み、何千年にもわたって祈り求めていた事柄なのである。これらの重大な出来事があった間、見えざる霊の世界とこの世を隔てている幕は非常に薄くなった。以後、この若い予言者に与えられた教えと靈感は、彼自身とその同僚たちによって、敬虔な思いと慎みとをもって語られた。そして、ジョセフをこの神権時代おける並ぶ者なき聖見者へと育て^{はぐく}ていったのである。ジョン・テイラー大管長の兄弟ウィリアム・テイラーの次の言葉は、予言者が受けていたこの大いなる賜に対する的を射た賛辞である。

「彼は現世に身を置きながら、この世の事柄だけでなく、霊の世界にもよく通じていたようである。」

*ロバート・J・ウッドフォード：ユタ大学末日聖徒宗教講座教師、ソルトレーク・ワインダー西ステーク部高等評議員

「もっと寝ていたい。まだ6時、まともな人間の起きる時間ではないわ。小鳥だってきつとまだ夢の中。それにきょうは日曜日、仕事から解放されていい日。でも働きに行かなくちゃ。足が重い。だけど行かなくちゃ。お願いあと10分寝かせて。」

私の名前はジャーナ。ソルトレーク・シティの末日聖徒病院で看護婦をしています。その日曜日の朝、私はこんなふうに見覚めました。末日聖徒病院の看護婦という仕事は好きでしたが、その日はそんな気分にはなれませんでした。急いで病院に向かいましたが、着いたのは7時5分。5分遅刻でした。入口の時計を見て、私は慌ててエレベーターの所に走って行き、ボタンを荒々しく押しました。でもエレベーターは5階で止まったままで、降りてきません。ぐずぐずしてはいられない。私は6つの階段を一気に駆け上がりました。心臓が破裂しそうでした。でもここは病院、心臓発作で倒れてもだれか助けてくれるのです。

入口のホールを通り抜け、受付の所に来ると、「もう始まっていますよ」というそっけない言葉でした。私はほほえんだ顔を引き締めると、看護婦たちが集合している部屋にそっと入って行きました。私たちはそこで、一日の仕事の指示を受けることにな

っているのです。

その日私は数人の患者を担当することになりました。それぞれに特別な問題を抱え、特別な世話を必要とする人たちでした。入浴の世話、シーツや枕カバーの交換、医療装置の監視、検温、食事の手配、カルテの記入、治療、包帯の交換、痛む筋肉のマッサージ、そのほか医師から指示されたすべてのことをしなければなりません。仕事はひとりでに終わってはくれませんから、私はただその仕事をこなすしかありませんでした。仕事をしていると、スピーカーから声が聞こえました。「患者の皆さんにお伝えします。礼拝行事に出席したい方は担当の看護婦にお申し出下さい。」「あっ、そうだわ、きょうは日曜日だったんだわ。」私は担当の患者さんに30分の短縮礼拝行事に出たかどうか聞いてまわりました。病気が重く疲れやすい人ばかりでしたから、出席したいという人はだれもいないだろうと思っていました。私自身もそんな気分でした。ところが、小柄なホイットマー姉妹が出たと言ってきました。彼女は関節炎と骨の癌にかかっていた。そのため寝たきりで、始終痛みを訴えていた人です。その彼女が、教会の集会に出席したいというので

あの安息日

ジャーナリー・ゲール



私は集会の管理者に、ホイットマー姉妹をベットごと運んでくれるように頼みました。それから私はすぐに準備にとりかかりました。慌ただしく彼女の髪をとかし、顔を洗い、ガウンを着替えさせ、シーツと枕カバーを交換しました。姉妹は体を動かすたびに痛みで顔をしかめました。でも、あのホイットマー姉妹が一言も苦痛を訴えなかったのです。準備が終わるとすぐに、兄弟たちが来て連れて行ってくれました。彼女のことはそれ以上気に留めず、ほかの患者さんのことに追われていました。

夕方になり、その日の私の仕事も終わろうとしていました。帰る前にもう一度きょう担当した患者さんを見てまわりました。ホイットマー姉妹はずっと前に集会から戻り、静かに休んでいました。ほかの患者さんたちも休んでいました。「よかった。」私は出勤の時と同じように急いでアパートに帰りました。

数日後、私が夜勤の時でした。仕事を終わろうとすると、4号室の呼び出しブザーが鳴りました。「今頃何かしら」と思いましたが、いやがらずに暗がりの中を病室に向かいました。それはホイットマー姉妹でした。

「ジャーナ？」という姉妹の声がしました。

「はいそうです。」

ホイットマー姉妹は手を伸ばして、私の

手をそっと握りました。そして小さな震えるような声で言いました。「この前の日曜日には教会に行けるように、いろいろ助けて下さって有り難とう。そのお礼が言いたかったの。私はそう長くはないと思うの。あの日教会に行けたことが私にとってどんなに意味の深いことか、あなたに伝えたくて。聖餐を受けた時……」しばらく間をおいてとぎれがちにこう続けました。「神のみたまを感じました。キリストが救い主だと、はっきり分かりました。」こう言って彼女は泣き出しました。私も涙を抑えることができませんでした。この美しい婦人は、肉体は弱っていますが、私にはない強さを備えていました。強い証を持っていたのです。習慣的に教会に行き、聖霊にあずかることなく、ただパンと水をいただく、そんな自分の姿を私は思い浮かべました。それに、あの日ホイットマー姉妹が教会に行く準備をする時、まるでやっかいごとのようにそそくさと片づけたことを思い出しました。二度とあのように考えまいと私はつくづく思いました。私たちはその夜、ともに泣きました。ほんの数分でしたが、ふたりの深い胸の内を分かち合うには十分でした。言葉はありませんでした。言葉はいりませんでした。手を握り合い、涙を流すことで心が通じ合ったのです。





(G. Contenau, Manuel d'Archeologie Orientale 4 [Paris:Picard]2215, figure 1244, used by permission.)

エゼキエルの「木」

キース・H・メサービー

いつの時代の宣教師も次の聖句は必ず引用しているはずである。「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。

あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ、これらはあなたの手で一つとなる。」(エゼキエル37:16-17)

エゼキエルは、イスラエルの回復という末日の主のみ業を助けるために、ヨセフの木、すなわちモルモン経がユダの木つまり聖書とひとつに合わせられるようになることを理解していた。これが上の聖句に対する末日聖徒の解釈である。エゼキエルが見たという「木」がどのような木であったかについては、教会員の中にも、^{わりな}巻物、^{しやく}笏など様々なとらえ方があるが、いずれにしても教会は、教義と聖約27:5を論拠として、このふたつの木はどちらも神の言葉を載せた書物であるとの見解を通して

しかし、この解釈についてはこれまで様々な反論がなされてきた。この「木」を杖あるいは王笏とするキリスト教界の伝統的解釈の方が、エゼキエルの言葉の真義としてふさわしいというのが末日聖徒イエス・キリスト教会外の聖書学者たちの主張である。彼らは木に関する予言のすぐ後に記されている主のみ言葉を強調する。そこにはこう書かれている。「わたしはイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し……その地にみちびき、……彼らを一つの民と

なして……ひとりの王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に分れない。」(エゼキエル37:21-22)

彼らの結論が、ふたつの王笏すなわち王権の統合は分裂したイスラエル諸族の再統一を象徴しているというものであることは明白である。予言者ジョセフ・スミスの解釈が文脈を無視した奇異なものに感ぜられるらしく、批評家たちは末日聖徒のこの解釈を、自分たちの教義の都合に合わせた牽強^{ひん}付会^{きようかい}であるとしている。

これらの批評を考慮し、ハロルド・B・リー長老は1968年、プリガム・ヤング大学で開かれたセミナー・インスティテュート職員のための集会において、教会の見解を再確認している。「報告によると、ヨセフの木はモルモン経ではない、あるいは、そのことを宣言している教義と聖約第5章は文字通りに解すべきではないなどと教えている教師がいるという。神は、だれであれそのような教えを説くことを禁じておられる。また、真理を知り、証を持っていながら、そういう教えが広められるのを、手をこまねいてただ傍観しているようなことをお許しにはならない。」(Viewpoint of a Giant, "BYU, 18 July 1968, p.6, published by the Department of Seminaries and Institutes of Religion.)

近年の素晴らしい発見は、1830年にはとても考えられなかった方法で、ジョセフ・スミスの見解が正しいことを立証している。それらの新しく発見された事実を検討するに先立って、若干、言語学的な観点からの

考慮をしておきたい。エゼキエル書のこの箇所^{箇所}で用いられているヘブライ語は、「木」という意味の「エーツ」である。

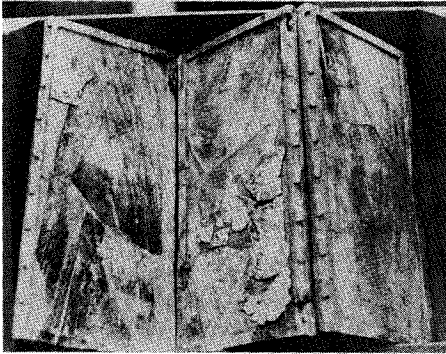
ヘブライ語の旧約聖書に、この「エーツ」という言葉は約300回出てくる。

紀元前3世紀に、ギリシャ語を話すユダヤ人のために、ユダヤ人によってヘブライ語からギリシャ語に翻訳された七十人訳聖書を見ると前述のヘブライ語「エーツ」は、ギリシャ語で木材を意味する「クシュロン」、また木を意味する「デンドロン」などの訳語を当てられている。「クシュロン」としては249回、「デンドロン」としてはわずかに15回出てくるだけである。七十人訳の翻訳者たちはヘブライ語を理解し、その細かなニュアンスの違いもわかまえていたはずであり、彼らが「クシュロン」を「エーツ」の原義として見ていたことは明らかである。



本のような形の書字板を持つ人物を描いた浮き彫り。「本」の「背」の部分にあるのは、書字板のちょうつがい

(Stele of Barrekub, photo by permission of Staatliche Museen Zu Berlin, Ford eradiastisches Museum.)



イラクの古井戸から発掘された木製の書字板
 (photo by Keith H. Meservy, from British Museum, London.)

もうひとつ重大なことがある。それは、七十人訳の翻訳者がエゼキエル書37章の「木」に対する訳語として、「クシュロン」ではなく「杖」を意味するギリシャ語「ラブドス」を用いている点である。特に大切なのは、このギリシャ語訳聖書（七十人訳聖書）全体の中で、ヘブライ語の「エーツ」が「ラブドス」と訳されているのは、この一箇所だけであるという点である。

彼らはなぜ「ラブドス」を用いたのだろうか。この問いに関する答えは極めて重要である。なぜなら、現代の聖書学者の多くが、この特殊な訳を、37章の問題の箇所に対する自分たちの説の論拠としているからである。

聖書学者たちは、七十人訳の訳者が、民数記17：2-3の物語の影響を受けたとの仮説を立てている。民数記のその箇所には、主が各部族の指導者たちに、それぞれの杖、

すなわち「ラブドス」にめいめいの部族の名を書き、それを夜の間幕屋の中へ置くようにと命じられたことが書いてある。したがって、エゼキエル書37章の場合もこれと同じだという結論に至ることは明白だ。それに加えてエゼキエル書37章の最後の箇所には、王国の再統一に関するあの予言がある。しかしこの説明の中のひとつの不備は、民数記で「杖」と訳されたヘブライ語が「エーツ」ではなく、「杖」の意の明解なヘブライ語「マッテ」であるという点にある。「杖」ということを言いたかったのなら、エゼキエルはなぜ「マッテ」を用いなかったのだろうか。

これらの事柄を念頭に置いて考察すると、イラクにおける考古学者や言語学者たちの発見が、新たな意味合いをもって迫ってくる。

現代のイラクは、古代の帝国アッシリアやバビロニアの版図であるメソポタミアをほぼ全域にわたって領有している。エゼキエルは紀元前593年に予言者として召された時、ネブカデネザルに連れてこられた多くのユダヤ人と共に、バビロニアで捕囚の境涯にあった。おそらく彼はバビロニアの町を歩きながら、書記然とした人が先端が三角形の筆を軟らかな粘土板に押し付けて、いわゆる楔形文字くさびがたを書いている光景を見たであろう。しかし現在の学者たちは、パピルス、羊皮紙、木版などが記録用にメソポタミアで作られていたことを確認している。過去においては粘土板しか発見されなかったが、その粘土板には、他の書写材料に関する言及があったのである。

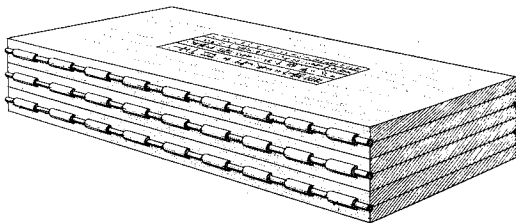
近代の考古学者たちも、パピルスや羊皮紙がどのような物かは理解していた。しかし木板すなわち木製の書き板とはどのようなものだったのだろうか。どのようにして楔形文字を板の上に書いたのだろうか。学者たちは、メソポタミアの人々は板の上にインクで書いたに違いないとの仮説を出した。

しかし、サン・ニコロが南バビロニア、ウルクのエンナ神殿の古文書群の中から発見した、紀元前596年および紀元前586年の粘土板にキリスト紀元の暦法による年代が記入されていることはあり得ない。日付のある2枚の粘土板によって、その仮説は覆されてしまったのである。その2枚の粘土板に文字を記した書記たちは、神殿の倉から木板に塗布するための蜜蠟（ほかにもサン・ニコロが知らない物が幾つかあった）を得たとの記述を残していた。

木板に蠟を塗るとはどういうことだろうか。サン・ニコロは、ローマ人や、ギリシヤ人が記録のために、木の板を用いていたことを思い出した。彼らが用いたその書き板は、へりの部分を残して表面を少し削り、そこに薄く蠟を塗ったものであった。書記たちはその蠟の上に文字を記した。木板を

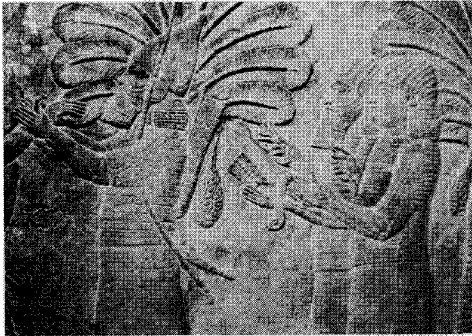
2枚重ねても、文字を記した面はそれよりも高いへりの部分によって、損傷することがないようにになっている。バビロニア人も同じことをしていたのではないだろうか。木版の表面に直接文字を書くことは非常に難しい。それに反して、楔形文字に慣れた者にとっては、^{せんりつ}尖筆で蠟の上を書くのも、粘土板の上を書くのも、大して変わらない仕事である。それに気付いたサン・ニコロは、バビロニア人たちは木板の上に蠟を塗り、それに文字を記したとの結論を出し、1948年の学会で発表した。そして、そのような版が過去に発見されなかったことについては、木質で腐敗しやすいためであったとの仮説を出した。それから5年後、古代アッシリア帝国領に当たる某地点で行なわれた発掘で、ひとつの発見がなされ、それに参加した考古学者を驚かせた。その発見はサン・ニコロの説に裏付けを与えるものであった。

考古学者マックス・マローワンの監督下においてなされたその発見は、旧約聖書にはカラとして出てくるニムロデの町のある古井戸の、深い軟泥層においてなされた。最初発見されたのは、150センチ四方、厚さ12センチの、^{そうげ}損傷のある象牙製の板であっ



ちょうつがいが見ついた書字板の使用を描いた古代の浮き彫りとその模写

(M. E. L. Mallowan, *Nimrud and Its Remains* 1 [London: Collins] 153, used by permission of British School of Archaeology, Iraq.)



ちょうつがいがついた書字板の使用を描いた古代の浮き彫りとその模写

(Photograph by Keith H. Meservy, from British Museum, London.)

た。その日の夕暮れ近くには、この壊れた象牙板の片半分が出土した。そして作業を終えるまでに、完全なふた組の書字板の断片を発見したのである。ひと組は木製、もうひと組は象牙製で、どちらも12枚組で、330×152×12センチの同じ大きさの板であった。

板の表面はすべて、幅12センチの外縁部を除いて、2.5センチ削られていた。その凹部は蠟を塗る部分であり、薄い蠟片がまだ付着している物もあった。また周辺の軟泥の中にも蠟片が発見された。

文字のほとんどは、泥で解説不能の状態であったが、まだこん跡があり、ある物からははっきりと楔形文字を読み取ることができた。

表紙にあたる板には塗布物はなかったが、両側にちょうつがいが付いていた跡が見られた。各組の16枚の板は、日本の屏風のよう^{びょうぶ}に、かつてはひとつにつなぎ合わされていたと考えられた。マローワンはこの大きな記録を、最古の本として発表した。

実験による分析は、塗布物に関して、さらに詳細なデータを提供した。それによる

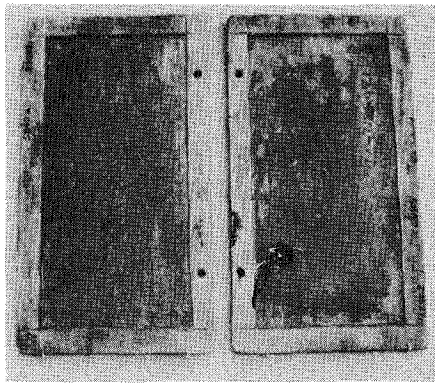
と、蠟の中には5分の1の割合で硫化砒素^{びそ}とが混じっていたのである。サン・ニコロが読んだ粘土板には、硫化砒素については書かれていなかったであろう。硫化砒素は蠟を軟らかい状態に保って、尖筆の跡がはっきりと付くようにし、塗膜を明るい黄色に見せていた。ある塗膜の断片は、小さな文字がはっきりと残されていたが、その配列が密集していて、30枚の書字板で、7500行ほどになるかと思われた。

ある木版の表題部には次のように書かれていた。「世界の王、アッシリア王サルゴンの宮殿。彼はこの象牙の巻の初めに、『エヌマ アヌ エンリヒ』と刻し、ダル・シャルキンの己が宮殿に納む。」紀元前705年にサルゴンが死ぬと、この宮殿は略奪された。そしてこれらの板は、金でできていたと思われるちょうつがいの部分をもぎとるために壊された後で、無用の長物として井戸に投げ込まれたのであろう。

この発見はサン・ニコロの発見に裏付けを与えた。学者たちは楔形文字の記録の中の、「イス レウ」に関する記述から、紀元前1700年頃まで古代バビロニア王国におい

て木の板が用いられていたことを知っていた。そして1000年後、その木の板はアッシリアの時代に、異教徒の聖典、典礼書、報告文書、勅令、人民の名前の登録簿、土地の詳細な登記簿、船荷証券、油の配給記録簿などとして用いられるようになった。

ひとつの例が確認されると、学者たちは、それを実際に用いている状況を描いたアッシリアの浮き彫りを思い出した。メソポタミア北部のアラム人たちが造った古代の記念碑にも同じような彫り物がある。ヒッタイト人の使用例はまだ確認されていないが、サン・ニコロは、楔形文字を使っていたヒッタイト人が木を書写材料に用い、そ



これらの書字板、すなわち「木」には、蜜蠟と硫化砒素の塗布物がまだ付着している。硫化砒素には蠟を軟らかくすると共に、蠟に鮮やかな黄味を帯びさせる働きをしている

(Reconstruction of Mesopotamian writing tablets, photograph by Keith H. Meservy, from British Museum, London.)

う記録法をする書記は特別な料金を受けていたと指摘している。

古代ローマ、ギリシヤの研究をしている学者は、ギリシヤ人やローマ人が蠟板を用いていたことを、昔から知っていた。ザカリヤはバプテスマのヨハネが生まれた時に、息子の名をそのような板の上に書いた。(ルカ1:63)そして、その方法はヨーロッパにおいては少なくとも14世紀まで続いたのである。要するに、書字のための蠟板は何千年にもわたって(紀元前17世紀から紀元14世紀まで)多くの文化の中でかなり広く用いられていたのである。

これらの事柄はエゼキエル書の聖句の解釈に関して、どのような助けを与えてくれるだろうか。いかなる解釈も言語学的な面での矛盾がなく、予言的な文脈の中でとらえられたものでなければならない。言葉の意味を決定するのは文脈だからである。これらの点に関して異論はない。

エゼキエル書の背景、文脈はバビロニアの世界の風俗、習慣である。エゼキエルが用いたヘブライ語は、バビロニア語の姉妹語であった。バビロニア語の「イス」はヘブライ語の「エーツ」と同源であり、どちらも「木」の意である。象牙製の書字板は、アッカド語では「シン ピリ」で作った「イス レウ」、つまり「象牙の木製書字板」(一見理に合わないが)と呼ばれる。「イス レウ」は「木製の書字板」の意にとどまらず、どのような材料でできている物でも、「書字板」ということになるのである。同じような例を挙げよう。本を意味するラテン語の「リベル」はもともと「木の皮」

の意味である。しかし今の時代の図書館員が木の皮の専門家というわけではない。

これらのことを考えると、エゼキエル 37:15-17を次のように訳すことにも納得がいくのである。

「主は私にこう言われた。『人の子よ一枚の書き板を取り、その上に「ユダとその友イスラエル」と書き、また一枚の書き板を取って、その上に「ヨセフ、エフライムのひと片〔の書き板〕と、その友なるイスラエルのすべての民」と書け。

そのふたつを合わせ、ひとつの書き板となせ。そうすれば、それらはあなたの手の中で、ひとつの折りたたみの書き板となるであろう。』

この翻訳はこれまで検討してきたエゼキエルの言語、文化背景に忠実に即したものであり、イギリスの主要なプロテスタント諸教派と聖書協会が支援したニュー・イングリッシュ・バイブルの中に実際に取り入れられている。したがって、「木」を「記録」とすることに対しては、もはや何の防御的な態度をとる必要もないのである。事態は逆転している。「木」を王様の象徴の笏という解釈（他の解釈も同様であるが）をしている人々は、エゼキエル書に関する自説を、文化的な背景の中でどう説明するか答えを迫られている。

マローワンらが書字板を発掘した直後に、井戸の壁が崩れ、ロープで下に降ろされていた老作業員が危うく生き埋めになりそうになった。井戸が崩れる前に、書字板を発掘し、作業員を救出できたのは、幸運以外の何ものでもなかった。マローワンは、書

字板の発見は単なる幸運以上の出来事であると、次のように述べている。

「この有機物が井戸の底で腐食を免れたのは……ほぼ奇跡としか言いようがない。事実、井戸の底の泥が〔腐食を抑制する〕特質を持っていたとしか説明のしようがないからである。

このような書字板はかつては西アジア一帯の諸都市に存在していたはずなのであるが、私たちは類まれなる幸運により、一箇所にかたままってかろうじて存在し続けてきた記録に日の目を見させることができたのである。こうして私たちは、当時としてはごく普通であったと思われる記録法の物的証拠を発見した。これは具体的な証拠としては、現在知られている中では最古のものである。

上記の発見は確かに、類まれなる幸運、また奇跡かも知れない。19世紀初頭、ニューヨーク州の辺境地に住んでいた予言者ジョセフ・スミスは、論理性も有する慣習的な解釈とはまったく正反対の解釈をしていた。しかも、その解釈を立証する発見がなされたのは、ようやく20世紀に入ってからのことである。この事実と比較すると、類まれなる幸運も奇跡も、たちまち色あせたものになると言わざるを得ない。このような詳細な事実を通して、回復された福音の全体像がさらに明確に浮かび上がり、ジョセフ・スミスの短い生涯に与えられた靈感の幅の広さ、奥行きが再び証明されてくるのである。

*メサビー兄弟はブリガム・ヤング大学古代聖典学助教授の任にある。

啓示

ダリン・H・オークス

啓示とは、神のみこころが人に伝えられることです。伝える方法は様々です。モーセやジョセフ・スミスたちのように、神に直接まみえて話した予言者もいますし、天使と言葉を交わした人もいます。そしてジェームズ・E・タルメージ長老が書いたように、「眠っている間の霊夢または精神が目覚めている間の示現を通して」与えられる啓示もあります。(ジェームズ・E・タルメージ「信仰箇条の研究」p.306)

啓示や靈感のより一般的な形としては、心の中にとどまる言葉や思い(教義と聖約8:2-3; イノス1:10参照)、突然の悟り(教義と聖約6:14-15)、自分の判断に対する積極的な思いや消極的な思い、あるいは優れた芸術に接した時の精神の高揚などもあります。

ポイド・K・パッカー長老はこう言っています。「靈感は音声よりも感じとしてくる方が多い。」(『祈りと答え』「聖徒の道」1980

年3月号, p.28)

読者がこういった様々な形の啓示や靈感に対する認識を持っているとの前提に立ち、様々な類別をしながら、啓示が与えられる目的について論じていきたいと思えます。神から人に授けられる啓示には、次のような目的があります。(1) 証する、(2) 予言する、(3) 慰める、(4) 励ましを与える、(5) 知識を与える、(6) 思いとどまらせる、(7) 確信を与える、(8) 行動を促す。この8例を、実例を挙げながら順に検討していきます。

このように分類し、その実例を示していくのは、読者に各自の経験を吟味し、自分がすでに啓示を受けていることと、神からの靈感は確かなものであり、さらに続けて啓示を受けることができるということを確信して欲しいからです。ロレンゾ・スノー大管長は「日々の生活の中でみたまの示し

を受けることは……すべての末日聖徒の大いなる特権」であると言っています。(Conference Report, April 1899, p.52)

ハロルド・B・リー大管長は次のように教えています。「人は皆、自分自身の事柄、子供の正しい養育、仕事などあらゆる面で、これらの賜と特権を行使する権利を与えられている。正しいことを行ない、また自分がなすすべての事柄において、知恵と分別、正義と善を示すことができるよう、啓示と靈感を受ける権利はすべての人のものである。」(ハロルド・B・リー, *Stand Ye in Holy Places*, pp.141-42)

以下において、啓示が与えられる8つの目的について検討していきますが、読者に望むのは、自分自身がこれまでどのような形の啓示、靈感を受けてきたかを理解し、この霊的な賜をこれからより豊かに受けていくために、その備えをする決心をすることです。



1

イエスがキリストであり、福音が真実であると告げる聖霊の証は、神から与えられる啓示のひとつです。

使徒ペテロが、イエス・キリストは生ける神の御子であると証した時、救い主は彼を呼び、こう祝福しました。「あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天に

いますわたしの父である。」(マタイ16:17) この重要な啓示は真理を求めるすべての人に与えられます。そして、人生のあらゆる局面において、導きを与えてくれます。



2 予言も、啓示の目的のひとつです。

男女を問わず、聖霊の導きの下に、自分の責任の範囲内において語るということを前提とするならば、将来起こる事柄を予言するよう靈感を受けることもあります。予言者、聖見者、啓示を受くる者としての召しにある人はジョセフ・スミスが南北戦争に関する予言や(教義と聖約87参照)、聖徒らはロッキー山中において強い民になるとの予言をしたように、教会全体のための予言をします。予言は祝福師の職務の一部でもあります。私たちは皆、時に応じて予言的な内容の啓示を受ける特権を有し、将来

与えられる教会の責任など、自分の人生の行く末の事柄を知らされることがあります。私自身の例を挙げたいと思います。私たち夫婦は5人の子供を授かっていましたが、その後は新しい子供に恵まれませんでした。10年以上の年月が流れ、私たちは我が家にはもうこれ以上子供は授けられないのだとあきらめ、とても悲しい気持ちになりました。ところがある日、妻が神殿で、もうひとり子供が授けられるとみたまのささやきを受けたのです。その予言は1年半後に成就し、6番目の子供が生まれました。13年の間待望していた子供でした。



3 啓示の目的の第3は慰めを与えることです

その例が、リバティーの牢獄で予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示です。何

カ月もの間ひどい状況下に置かれていた彼は、苦しみと孤独の中から、自分自身と迫

害されている聖徒たちとをみそなわしたま
えと主に嘆願しました。そして次のような
慰めの言葉が与えられました。

「わが子よ、^{なんじ}汝心安かれ。汝の不幸、汝
の困苦はただこれ^{つか}束の間なり。然^{しか}り而^して、
もし汝よくこれを耐え忍ばば、神は汝を高
きに挙げたまわん。かくして、汝あらゆる
敵に勝つことを得ん。」(教義と聖約121：
7-8)

主は同じリパティの牢獄で与えられた
啓示の中で予言者に、どのような悲しみや
不当な扱いを受けようとも、それは「皆汝
に善^よからんため、汝に経験^しを与えんための
もの」(教義と聖約122：7)であると宣言
されました。

慰めを与えるために与えられた啓示はほ
かにもあります。この世を去った愛する人
の訪れを受けたり、その存在を身近に感じ
たりして慰めを受けた人もいます。夫に先
立たれたある婦人から、死んだ夫の霊を近
くに感じ、その愛と関心を確信したという
話を聞いたことがあります。失業、取引き、
結婚のことで慰めを与えられた人もい
ます。慰めをもたらす啓示は、神権による
祝福と関連して与えられることもあります。

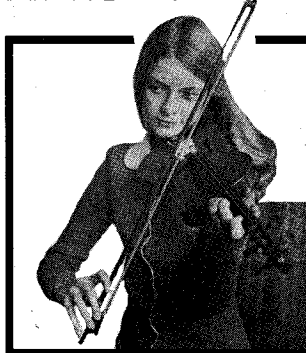
また、祝福の言葉や、単にそこから感じる
気持ちなどを通して与えられる場合もあり
ます。

慰めをもたらす啓示のもうひとつの例と
して、罪が赦されたという確信が挙げられ
ます。モルモン経に出てくるある予言者は、
一日中熱烈な祈りを捧げた後で、次のよう
な声を聞いたと書いています。「汝の罪はす
でに許されたれば汝は祝福を受くべし。」

イノスはさらにこう続けています。「私の
罪はすでにこれで取り消されたのである。」

(イノス5-6。教義と聖約61：2参照)
悔い改めのすべての段階を踏んだ人に与え
られるこの約束の言葉は、罪の贖いを終え
たこと、また神が祈りに耳を傾けて下さっ
たこと、罪が赦されたことを確信させてく
れるものです。アルマは罪の赦しが得られ
た時のことを次のように描写しています。

「私はもう……再び自分の罪を思い出して
苦しむこともなかった。ああ、この時私の
感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはい
かにも大きかった。……私は……喜びに満
ちたのである。……その時に感じたほどの
甚^{はなはだ}しく美しい喜びがこの世にまたとあろ
うか。」(アルマ36：19-21)

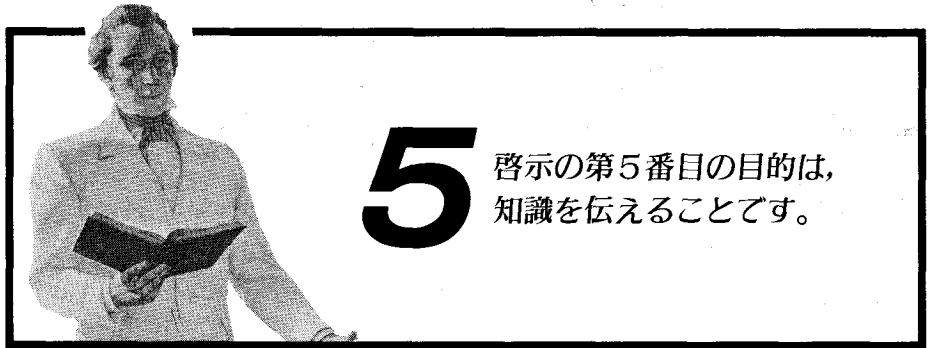


4

慰めを与える啓示と密接な関
係にあるのが、励ましを与え
る啓示です。

私たちは落胆、不安、無力感、霊的なマンネリ状態から脱しなければいけない時があります。そうすることによって自分自身の霊を高めることができ、悪に立ち向かい、

善を行なう力を受けることができます。聖典を読んだり、健全な音楽や絵画、文学を鑑賞したりする時に感ずる精神的な高揚も、啓示が与えられたことを示す、ひとつの重要な結果ではないでしょうか。

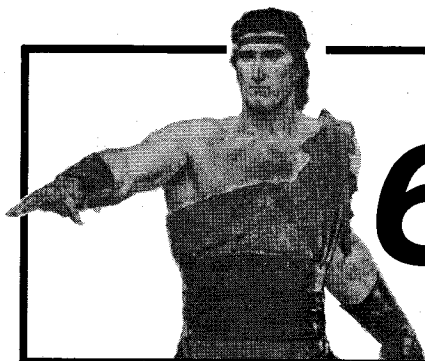


この中には、祝福師の祝福、説教など何か特別な場合に語るべき言葉を教えてくれる靈感や、聖霊の導きの下に語られる言葉も含まれます。主はジョセフ・スミスとシドニー・リグドンに、「言うべきことはその時その瞬間に与え」られるから、心の中に与えられる思いを、声を挙げて語れと命じられました。(教義と聖約100:5-6。84:85; 124:97参照)

天のみ使いとの直接的な会話を通して知識が与えられるという神々しい啓示も幾つかあります。古代や近代の聖典の中にはそのような例が幾つか載せられています。また、みたまの静かなささきを通して必要な事柄が教えられる場合もあります。大切な宝物を失くした子供が助けを求めて祈り、そのありかを知らされたケースもあれば、

仕事や家庭、また系図探求のことなどで問題にぶつかったおとなが、祈りを通して、その解決に必要な事柄を知らされたケースもあります。また教会の何かの責任に、だれを召したらよいか答えを祈り求めた指導者に、みたまが具体的に名を挙げて答えたというケースもあります。私たちがよく耳にするこれらの事例に共通しているのは、導きと教えを与えるために、聖霊が教師もしくは啓示する者としての働きをなし、知識、真理を伝えているという点です。

証、予言、慰め、励まし、知識、以上5点の中には確かに神の啓示の力が働いています。これまではおもに聖典の中から例を引いて簡単に説明してきましたが、残り3点については、私の個人的な体験を例にしながら、詳細に検討したいと思います。



6 啓示の第6番目の目的として、何かを思いとどまらせることがあります。

ニーファイは聖霊の力について語った偉大な説教の中で、突然次のように語りました。「さて……これ以上話すことができない。『みたま』が私に話すなと仰せになる。」

(Ⅱニーファイ32：7) 何々をしないよという形の啓示は、数多くあります。この種の啓示は特別な事柄に関して啓示や導きを求めていたわけでもないのに、不意に与えられることがよくあります。しかし、常日頃神の戒めを守り、みたまの導きに従った生活をしているならば、この力が働きかけて、過ちを犯さないように導いてくれるでしょう。

私はシカゴで副ステーキ部長に召された直後に、そのようなみたまの導きを受けたことがあります。最初のステーキ部長会の際に、ステーキ部長がある所にステーキ部センターを建てたいという計案を出してきました。すぐにその場所は不相当だという理由が幾つか思い浮かびました。私は意見を求められた時、それらの理由を一つ一つ挙げて、反対意見を述べました。すると、ステーキ部長は各自が1週間その問題について祈り、次の集まりの時にもう一度話し合おうと提案しました。私はお

ざりな気持ちでその問題について祈りました。ところが祈るとすぐに、自分は間違っている、主のみこころの成就を妨げている、反対意見を取り消さなければならないと強く感じるものがあつたのです。言うまでもなく、私は自分の気持ちを抑えて、提案されていた建築計画に同意する旨を伝えました。ついでに言うと、その建築計画がまさに当を得たものであつたことは、私のような者にも、後ですぐに明らかになりました。結局私が挙げた反対理由は近視眼的なものであることが分かり、間もなく自分の考えを撤回するよにとの促しを受けたことを感謝することになりました。

何年か前のこと、私はブリガム・ヤング大学の執務室で、自分のサインを待つばかりの1枚の書類に目を通していました。その書類の内容について、私は連日少なくとも10回以上は何かをしてきました。私がその書類にサインをすれば、大学は必然的に私たちが選択したある一定の事柄を履行するよう求められることになっていました。しかし、サインをしようとした時、非常に消極的な思いと不安を感じ、私はそれを保留事項とし、もう一度すべてを洗い直すよ

うに依頼しました。数日の内に、それまで分からなかった問題点が明らかになってきました。もし既定の方針通りに事を進めていたら、大学は将来非常に厄介な問題を抱え込んでしまうところだったのです。

みたまの助けを得たもうひとつの例を挙げたいと思います。それは私が判例集の編集をしていた時でした。判例集は何百という判決文、解説資料、編集者による本文などで構成されます。私は助手と一緒に、最終的な内容の確認も合わせて、作業をほとんど終えていました。ところが、出版社に送付する直前になって、原稿に目を通していた時、ある箇所に関心にかかると

を感じ、非常に不安になりました。そして助手にそこの箇所間違いがないかどうか再確認するように頼みました。彼の報告では、何も問題はないということでした。しかしその後の最終稿確認の時も、例の箇所がまた気にかかり、不安感に襲われました。それで今度は自分の足で図書館へ行き、調べてみることにしました。そして新しく買ったばかりの専門書を読んで分かったのは、自分の原稿の中に見落としがあることでした。もしあのまま原稿が本になって出ていたら、私はその道の専門家として大きな不面目を被っていたでしょう。それを救ってくれたのは、再検討を促してくれた啓示だったのです。



7

普通、啓示を求める時は、まず自分なりの考えを決め、その後でそれを確認する靈感が与えられるよう祈り求めます。

主は、オリヴァ・カウドリがモルモン経を翻訳しようとして挫折した時に、確認を与えるための啓示について説明されました。

「見よ、汝いまだ悟らず。汝はひたすらわれに願ひし時はこれを与えらるるならんと思えり。

されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しか

らば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」
(教義と聖約9：7-9)

同様に、予言者アルマは福音を学ぶ人々に向かって、神のみ言葉を種にたとえ、もし心の中にその種をまくならば、種は彼らの心を開き、理解力を増し加え、快いものを感じさせてくれると言っています。(アルマ32参照) これが、神のみ言葉の真实性を

証する、聖霊による確認の啓示です。

何年前かに十二使徒定員会会員のブルース・R・マッコンキー長老はブリガム・ヤング大学で、「自由意志と啓示」というテーマの話をし、啓示を求める前に、まず自分で最善を尽さなければならないと強調しました。マッコンキー長老は個人的な体験を披露してくれました。彼が永遠の伴侶を見つけようと思った時の話です。彼は初めから、だれと結婚したらよいかと主に尋ねたのではありません。彼はこう言いました。「私は自分の足で出て行き、結婚したいと思う女性を見つけました。……彼女は私が考えていた結婚相手のイメージにぴったり合っていました。……彼女こそ自分の永遠の伴侶になるべき人ではないかと思いました。……それから私がしたのは、自分が出した結論に関して導きを下さるよう、主に祈ることだけでした。」(*Speeches of the Year, 1972-73, pp.107, 111*)

マッコンキー長老は自由意志と靈感のバランスについて次のように語り、話をまとめています。

「私たちは賜、才能、知覚、判断力、自由意志など、すでに与えられているものをよく用いるよう期待されています。……信仰をもって主にうかがう前に、自分が目標とするところを達成するために、最善を尽くさなければなりません。……私たちは自分の力を使って、できる限りのことをするように求められています。それから、自分が出した答えが正しいかどうかの確認を求めて、主に祈るのです。」(同上, pp.108, 110, 113)

私は十二使徒会地区代表として、十二使

徒や他の教会幹部が、だれをステーク部長に召すか、啓示を求める場に立ち合う特権に浴したことが何度かあります。どの場合も、手順は同じでした。彼らはまずそのステーク部内の、副ステーク部長や高等評議員の職を務めていた人々、また監督や、教会の管理運営に関して特別な経歴を持つ人々などを面接し、その人々に質問をしたり、考えを聞いたりします。この面接を行ないながら、主の僕は一人一人を祈りの気持ちをもって見ていきます。そして最後に彼の結論を出し、その案を祈りの内に、主に差し出すのです。もしその案がみこころに適うものとして確認されると、召しが行なわれます。もしその確認が与えられず、決定を思いとどまらせる働きかけがあった場合は、それは見送られ、新しい案が出されて、確認の啓示が与えられるまで、同じ手順が繰り返されていきます。

確認の啓示と、抑制的な働きの啓示は、密接に関係し合っている場合が多くあります。私はブリガム・ヤング大学に勤めていた時、全国弁護士連合会の席上で講演をするよう依頼を受けたことがあります。とは言ってもその種の責任は準備に多くの日数を要し、私は大体断わることにしていました。ところが、責任を辞退する旨の手紙を書こうとした時に、それを思いとどまらせようとする何かを感じたのです。私はしばらく自分がしようとしていることを考え直しました。それから、その責任を引き受けた場合のことを考えてみました。そうすると、みたまの確認が与えられ、引き受けるべきことを知らされたのです。

「一私立大学と行政」と題したその講演

は多くの素晴らしい機会を与えてくれました。全国的に有名な幾つかの団体から、それと同じ講演をして欲しいとの依頼がありました。またそれは「バイタルスピーチ」誌、専門誌など様々な書籍に掲載され、大学の自治に関する私学界の指針として用いられるようにもなりました。この講演によって、ブリガム・ヤング大学には、様々な教派の教会から、行政当局と教会が経営する大学の関係について助言を求める声が寄せられました。そしてそれらの話し合いの

中から、教会経営の大学の全国的組織の結成へと事が進み、将来大学の自治に行政側からの不当な干渉がなされた場合にそれに対抗していくという点で、非常に意義深い結果がもたらされたのです。これらのことを考えると、辞退しようとしていたあの講演依頼は、表面的には小さなものに見える行ないが、大きな変化を生み出すというひとつの事例だったのだと心に強く感じます。このような時こそ、主の導きを受けなければならぬ大切な時であり、聞き従う心を持つ人に啓示が与えられ、助けがもたらされる時なのです。



8 第8番目の種類の啓示は、み たまがある行動を促すという 形で示されます。

これは、自分の考えを提示し、それに対してみたまの確認を受けたり、抑制的な感じを受けたりするケースとは異なります。自分では考えても、求めてもいなかった事柄について啓示が与えられるのです。この種の啓示が与えられる頻度は他と比べると非常に少ないものです。しかし、だからこそ重要なものと言うことができるのです。

ひとつの例がニーファイ第一書に出ています。エルサレムの宝庫から貴重な記録を手に入れた後で、ニーファイは道の上に酔

いつぶれているレーバンを殺すようにと主のみたまの命を受けました。それは人間の自然の情としてとても耐えられないことであり、ニーファイはみたまの声に抗がいました。しかし、再びレーバンを殺すように命じる声があり、ニーファイは最後にはその啓示に従ったのです。(I ニーファイ 4 参照)

教会歴史を学んだ人なら、夜中に馬車を大木の側から動かすようにとの声を聞いたウィルフォード・ウッドラフ大管長の物語

を知っていることでしょう。彼はその声に従い、30分後に襲ってきた嵐で木が倒れた時に、家族と家畜を救うことができました。

(see Matthias F. Cowley, *Wilford Woodruff, History of His Life and Labors*, pp.331-32)

私の祖母チェステイ・オルセン・ハリスも若い時に同じような体験をしています。場所はユタ州のキャッスルデール、家の近くの干上がった川底で何人かの子供たちを遊ばせていた時のことです。突然彼女の名を呼び、子供たちを川底から土手に上げるようにと言う声が聞こえてきました。とても天気の良い日で、雨が降りそうな気配などはまったくありませんでした。その声に聞き従う理由はどこにも見当たらず、彼女は川底で遊びを続けました。ところがせかさうな声^{おぼ}がまた聞こえてきたのです。今度ばかりは彼女もその警告に従いました。急いで子供たちを集めると、土手に駆け上がりました。そうすると、何キロも離れた山の突然の豪雨による水が濁流となって峡谷を走り、子供たちが遊んでいた場所をものすごい音をたてながら流れて行きました。彼女を駆り立てたその啓示がなければ、彼女も子供たちも溺れ死んでしまっていたことでしょう。

私はマービン・ヒル教授と共同で9年間にわたって、「カーセージの謀議」という本の著述を進めたことがあります。1845年にジョセフ・スミスを死に追いやった人々が行なった裁判を扱った本です。私たちの手元にはその裁判に関する幾つかの記録がありました。その中には記録者の署名がない物もありました。最も完全な記録にも署

名がありませんでしたが、その出所が教会歴史事務局であったこともあり、裁判の状況を記録するために派遣された教会の書記ジョージ・ワットが作成した物と確信していました。そして、第7草稿にはそれをジョージ・ワットの手になる物と書き、すべての資料をその仮定のもとに分析していったのです。

作業が終わり、2、3週間の内に最終稿を出版社に送ることになりました。土曜日の午後、私は執務室にいた時に、机の後ろのテーブルに内容を調べないまま積んでおいた本とパンフレットの山をよく見直すように促す何かを感じました。数十もあるその資料の一番下に、ウイルフォード・C・ウッド記念館の蔵書目録がありました。1年半ほど前にそれを著したラマー・ベレット教授から送られてきていた物です。その目録の教会歴史関係の箇所^{箇所}に急いで目を通していくと、私たちがジョージ・ワットの記録と考えていた法廷記録を説明したページに目が留まりました。そこには、ウイルフォード・C・ウッドがイリノイ州でその原記録を購入し、タイプライターで清書した物を教会に寄贈したいきさつなどが書かれていました。私たちが教会歴史事務局から得たのが、その清書原稿なのです。

私たちはすぐに、ユタ州ウッズクロスのウイルフォード・C・ウッド記念館に行き、教会の公式記録と考えていたその資料が実はある弁護士が作成した裁判用の準備資料であることを物語る追加情報を得ることができました。そして、教会歴史事務局へ戻り、初めてジョージ・ワットが書いた公式記録を見付けることができたのです。この

発見によって、私たちは重要資料の出所の確認で大きな誤りを犯さず、その著作の質を格段と上げることができたのです。私があの日、事務室で受けた靈感は、みたまによる靈感を受ける備えができていながら、仕事上のことでも主の助けを受けられるという良い例です。

人に何かを促す啓示として、私が体験したもうひとつの例を紹介したいと思います。私がブリガム・ヤング大学に奉職して数カ月後のことでした。不慣れなところの多い新任学長の私は、検討を要する数多くの問題、懸案事項を抱えていました。主に頼るほかにありませんでした。10月のある日、私はひとつの問題について考えるために、自動車を駆ってプロボ・キャニオンへ行きました。そこには人ひとりなく、何の邪魔もありませんでしたが、その問題について、どうしても考えが進みませんでした。まだあまり深く考えていなかったとはいえ、もうひとつ別の問題があって、それに心が向いてしまうのです。それは大学の教科課程を、クリスマス前までに、秋のセメスター（学期）を終えられるように変更すべきかどうかという問題でした。しばらくの間、そのことを頭の中から追い払おうとしましたが、どうもうまくいきませんでした。その時、心にはっと感ずるものがありました。私自身は教科課程の問題をさほどの急務とも考えず、導きも求めていなかったのですが、みたまはそのことで、私に何かを伝えようとしていたのです。私はすぐに、頭を教科課程の問題の方に切り換え、自分の考えをメモ用紙に書き始めました。そして数分後には、万事がうまくいく詳細な日

程を作り上げることができたのです。

大学へ急いで戻り、他の職員たちとその案について再検討をすると、彼らも乗り気な姿勢を見せてくれました。私たちが提案した新しい教科課程は数日後、理事会で承認され、1972年の秋のセメスターから実施できるぎりぎりの線で、発表することができました。以来、予言者ジョセフ・スミスの次の言葉を読む度に、自分はその言葉通りのことを体験したのだと実感してきました。「人は啓示のみたまの最初のさきやきを自覚しただけで祝福を受ける。例えば聖い知識が心に流れ込むのを感じた時、あなた方の心にはいろいろな考えが閃光のように次から次へと浮かんでくるであろう。…そして神のみたまがどのようなものかを知り、理解する時、あなた方は啓示の原則を自分のものとして進歩し……。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*, p.151)

これまで私は、(1)証する、(2)予言する、(3)慰める、(4)励ます、(5)知識を伝える、(6)思いとどまらせる、(7)確認する、(8)促すという啓示の8つの働きについて述べてきました。これらは皆、正しい源から来る啓示の働きとして認められるものですが、最後に、それとは逆の、偽りの啓示について少し述べておきたいと思います。

まず最初に私たちは「召しとそれに伴う啓示」と呼ばれる原則を理解しておかなければなりません。天父の家は秩序の家であり、主の僕たちは「己が任命せられたる務め」(教義と聖約107:99)の中で働くよう命じられています。この原則は啓示にも当てはまります。教会全体を導くための啓示

を受けるのは大管長だけです。ステーキ部に特別な導きをもたらす啓示を受けるのは、ステーキ部長だけであり、ワード部に関する啓示を受けるのは監督だけです。個々の家庭にあって、家族たちのための啓示を受けるのは、神権による指導者としての父親です。指導者は自分の責任の範囲内で啓示を受けることができます。そして、私たちは皆、自分自身の生活を導く啓示を受けることができるのです。それでは、ある人が自分の責任範囲外の人に関する啓示を受けたと主張してきた場合はどうなるのでしょうか。例えば、ある教会員が教会全体を導くための啓示を受けたと主張したり、教会の秩序から見て自分の管理権能の対象外にある人々を指導する啓示を受けたと主張するような場合です。答えは明確です。そのような啓示は主から与えられたものではありません。「にせ電波もあることを知っておく必要がある。」(ボイド・K・パッカー『祈りと答え』「聖徒の道」1980年3月号, p.29)

サタンは大いなる偽り者であり、これらの偽りの啓示の中には、サタンから与えられたものもあります。他のものについてもおおよその見当はつきます。

責任範囲を越えた事柄に関する啓示なら、それは主から与えられたものではなく、何の拘束力もありません。「私はあなたが私の永遠の伴侶になるという啓示を受けました。ですから、あなたは私と結婚しなければなりません」というようなことを言う男性がいることをよく耳にします。もしそれが真実の啓示なら、相手の女性が本当に知りたいと思った時に、直接啓示による確認を与えられるはずです。ですから、前述のよう

な啓示に気を留める必要はありません。女性も自分自身で導きを求め、決定を下すべきなのです。また、男性側も自分のとるべき行動について導きを求め、啓示を受けることはできますが、女性に指示するための啓示を受けることなどはできません。自分の管理権外のことなのです。

啓示を求めても、与えられない場合があります。これについてはどう考えたらよいのでしょうか。

求めたからと言って、必ず靈感や啓示が与えられるとは限りません。啓示が与えられるまで待たなければならない時もありますし、自分自身の判断力を用いなければならない時もあります。霊的なものを力づくでもぎ取ることはできません。当然と言えば当然のことです。もし天父が重要な事柄も含めて、すべてのことについて私たちに指示を与えられるなら、経験を積み、信仰を強めていくという人生の目的は空しいものとなってしまいます。私たちは自ら決定し、自立心と信仰を養うために、その結果を受け止めていかなければならないのです。

非常に重要だと思える事柄について、答えが与えられない時がよくあります。しかし、祈りが聞かれていないというわけではありません。何らかの理由でその問題については、啓示の導きを受けずに自分自身で結論を出さなければならないということなのです。それはおそらく、選択肢のどちらを取っても可、あるいは不可とされるものだからなのではないでしょうか。正しいか間違いかという、二者択一的な単純な公式ですべての問題を割り切ることはできません。想定したふたつの選択肢のどちらも正しい、

あるいはどちらも正しくないという場合が多くあります。ですから、自分に悪をなした人に仕返しをするために、ふたつの方法の内どちらを取るべきかなどと考えて導きを求めても、啓示は与えられないのです。将来、より望ましい解決方法が出てくることが考えられる事柄について、二者択一的な考え方で導きを求めても、やはり啓示は与えられません。求める必要がないからです。私は妻と共に、あるひとつの事柄について熱心に導きを祈り求めました。私たちにとって、それはとても重要なことのように思えました。ところが答えは与えられず、私たちは自分たちの最善を尽くすしか手だてがありませんでした。私たちはどうして主が答えを下さらないのか、理解できませんでした。しかし間もなくその理由が分かりました。ひとつの出来事があった、私たちは別に結論を下さなくてもよいようになったのです。主は、どれを選んでも変わりがない事柄については、導きを与えられません。

どちらを選んでも主に受け入れられるような選択について導きを求めても、答えは与えられません。つまり、どちらの道を選んでも、良い働きができるということもあるのです。つまりどちらも間違っていないのです。同様に、あまりささいな事柄についても、主のみたまによる啓示は与えられません。ある若い姉妹が証会で夫の靈性をたたえるのを聞いたことがあります。彼は何事についても主に尋ね求めるといいます。彼は妻の買い物について行くと、野菜のかん詰めひとつ選ぶにしても、どのメー

カーの物がよいかを主に祈り尋ねました。でも、それが正しい方法なのでしょう。主はこの程度のことについては、すでに与えられている知識や体験を用いるように望んでおられるのです。予言者ジョセフ・スミスはある会員から何かのことで助言を求められた時に、「神に尋ね、神のみもとに行くのは素晴らしいことである。しかし、ささいなことで主にうかがいをたてるのは畏れ多いことである。」(History of the Church, 1: 339)

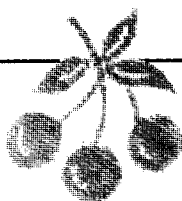
もちろん、私たちは何がささいなことかをいつでも判断できるとは限りません。もしささいな事柄なら、自分自身の判断力を用いていかなければなりません。何らかの理由で、事の重大さが分からないという問題もあります。私が受けた話の依頼はその例です。また、ふたつのかん詰めの内どちらかに毒が入っていて、そのひとつを選ぶというような場合にも言えます。そういう場合は、主が導きを与えて下さいます。事の重大性が明らかになっているいまいにかかわらず、生活に重大な影響を及ぼす選択の機会が訪れた場合、みたまの勧めに従い、導きを求めている人には、目的を達成するのに必要な導きが必ず与えられます。私たちが永遠の幸福に大きな影響を及ぼす選択を迫られた時、主は必ず導きの手を差し伸べて下さるのです。

* オークス兄弟はブリガム・ヤング大学前学長。現在はユタ州最高裁判所判事を務めている。

すばらしい おくりもの

クリスマスのメッセージ
大管長会から世界の子供たちへ





クリスマスのきせつは1年中で
いちばん楽しい時です。

覆ひつじがいたちに天使があらわれ、ベツレヘムに神さまのとくべつな子が生まれたと言いました。

「すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

御使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。……

あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。』

するとたちまち、おびたしい天の軍勢が現れ、御使いと一緒になって神をさんびして言った、

『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。』

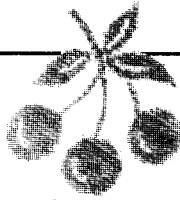
(ルカ2：9-14)

天のお父さまはイエス・キリストをこの世におくつて下さいました。

それは、むかし生きていた人も、今生きている人も、これから生まれてくる人も、ひとりのこらずれの体をつくってくれた天のお父さまのところへ歸り、いっしょにすめるようにするためでした。でもそうするためには、まずイエスさまがこの世に生まれ、手本を通して、人々にどういうふうにくらしたらよいか教えなければなりません。そして自分の命をすて、ふしぎなほうほうで、本当はわたしたちがとらなければならないつみのせきにんを、みがわりになって引き受けて下さいました。それでわたしたちもふつかつできるようになったのです。

イエスさまがこの世に生まれ、わたしたちのつみのせきにんを引き受け、ふつかつしたことは、とてもすばらしいおくり物です。そのおかげで私たちは、生きている間も、死んで来世に行つてからも、幸せになることができます。

クリスマスといえばプレゼントで



す。でも、いつまでたってもこわれ
たりくさったりしない、すてきなプ
レゼントがあることをしています
か。少し考えてみてください。

天のお父さまとイエス・キリスト
は、どんな時でもあなたをあいして
います。

あなたのお父さんやお母さん、そ
れに兄弟も、あなたをあいし、まい
にちあなたのためにいろいろなこと
をし、心配してくれます。

先生たちは正しいことをしなさい
と教えてくれます。

悪いことをした時でも、本当にく
いあらためれば、神さまはゆるして
くれます。

やる気があれば、神さまの言った
ことを守ったり、勉強していろい
ろなことをおぼえたり、体を強くする
こともできます。

ほかの人を助けて、楽しい気持ち
になることもできます。

たくさんの方があなたが心配ごと
を持たないで、安全に守られ、しつ

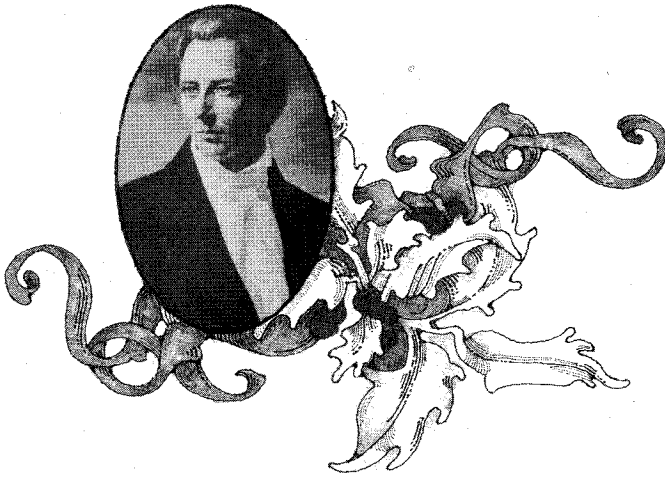
ぱいをしないようにといのつていま
す。

こういうプレゼントは今だけでなく、
いつまでも心のなかにしまってお
けます。

ほかの人にもっとやさしくし、な
にかをされてもゆるしてあげるよう
にしましょう。うちの人や先生、そ
れにあなたのためにいろいろのこ
とをしてくれる人たちにかんしゃの気
持ちをつたえるには、どうしたらよ
いでしょうか。あなたがだれかによ
いことをすると、その人もまたべつ
の人にしんせつにし、たくさんの人
がよい気持ちになれます。とくに天
切なのは、よくおいのりをし、いつ
もえがおをわすれず、ほかの人がど
んなことをしても、じぶんは正しい
ことをすることです。

私たちはみなさんをあいしていま
す。みなさんの上に神さまのしゆく
ふくがあり、楽しいクリスマスをお
くることができるようにおいのりし
ます。

ジョセフ兄弟



12月23日は予言者ジョセフ・スミスが生まれた日です。

ジョセフ・スミスは子供が大好きでした。そして子供たちもジョセフ・スミスを愛していました。ジョセフ・スミスは自分を殺そうとする人々をさけるために、ある家に隠れていたことがあります。その家には子供たちがいて、予言者の身を案じているおとなたちの話を聞いて、同じように心配していました。そして、ある7歳の女の子がこう言いました。「子供でもできることがあるわ。」

ジョセフ兄弟が守られるように天のお父さまにおいのりするのよ。」

それから何分かして、予言者がある部屋の前を通りかかった時のことです。その中では子供たちがいっしょにひざまずき、予言者を守って下さいとおいのりをしていました。予言者は思わずなみだを流してしまいました。

それから予言者は、自分の部屋にもどると、そこを守っていたおとなたちに、だいじょうぶだから、自分たちの家に帰って下さいと言いました。予言者は子供たちのおいのりが

神さまに聞きとどけられることを知っていたのです。そして確かに、その夜は何も起こりませんでした。

小さいときにジョセフ・スミスと会ったり、話したことのある人たちの言葉を読んでみましょう。

予言者ジョセフ・スミスは私たちのとなりの家にいました。私たちが住んでいたのは、本通りとパーレ一通りが出合う所で、予言者の家のとなりでした。予言者は短い時間でしたが、よく私たちの家に来ました。

ある日、兄のウォーレスと学校に行くときちゅうのことでした。前の日に雨が降って、道がとてもぬかるんでいました。ジョセフの家の前は特にひどいぬかるみでした。私と兄はぬかるみに足を取られ、前にも後ろにも進めなくなっていました。そして子供でしたから、とうとう泣き出してしまったのです。顔を上げると、子供たちのすばらしい友達、予言者ジョセフ・スミスが私たちの方へ来るのが見えました。予言者はすぐに私たちを、もっと高くてかわいたところに運んでくれました。そ

れから、かがんで私たちのどろだらけのくつからどろを取り、ハンカチを出してなみだをふいてくれました。予言者は私たちにやさしい言葉をかけて、元気を出して学校へ行くようにと言いました。どうして私と兄が、ジョセフを愛しているか、わかっていただけたと思います。

何年も後に、私は夫から子供時代の話の聞きました。ジョセフ兄弟が夫の家に来て、その母親に、ふた子のひとりを貸してほしいと言ったそうです。そのとき、予言者の妻のエマは生まれたばかりの子供をなくし、とても悲しんでいました。それで、予言者は朝になるとひとりの赤ちゃんを連れて行き、夜になると返しにきました。

ところがある夜、いつもの時間になっても赤ちゃんを返しに来ません。母親は一体どうしたのかと、ようすを見に行きました。すると、だんろのそばで、赤ちゃんを抱いているすがたが見えました。予言者は赤ちゃんにきぬのキルトをかけて、歌を歌いながら、ねかしつけようとしていたのです。

マーガレット・M・バージェス



わたし
私が予言者を初めて見たのは14歳の時でした。初めて見た時、その人が予言者なのだということはすぐにわかりました。そして、この人こそ神の予言者なのだというあかしを受けました。胸がドキドキするような、あんなすばらしい気持ちは味わったことはありませんでした。どの人が予言者なのか教えてもらいせんてしたが、私にはひと目でわかりました。そして、まだ子供でしたが、あの人は神の予言者なのだと思いました。

メアリー・アリス・ランバード



14歳の時、予言者が私の家に来て、しばらくいました。13日間いっしょにくらしました。私はそれまで会ったどんな人よりも予言者が好きになりました。父や母よりもです。

ジョン・W・ヘヌ



わたし
私は予言者ジョセフ・スミスを知っていました。私たちが校庭で遊んでいると、よく立ちどまって話しかけてきました。必ず女の子たちとあく手をしたり、男の子たちとビー玉遊びをしました。予言者は子供たちの大の人気者でした。

メアリー・ジェーン・ライトル



わたし
私は予言者を知っていました。7歳の時、私は予言者の兄ハイラムのれんが作りの事務所で、ミッチェル先生から勉強を習っていました。ある朝、その家の前を通りかかると、予言者が顔を出して私に呼びかけ、学校で何をよんでいるのかと聞きました。「モルモン経です」と答えると、うれしそうな顔をしていました。それから、私を家の中に呼んで、学校で使うようにと、モルモン経をくれました。それは私の宝物です。

ジェシー・N・スミス



雪 やつらに、^{たいよう ひかり ほんしや}太陽の光が反射して、まぶしく^{かがや}輝いていました。山火事の^{やまかじ かんしとう}監視塔の上から見えるのは、^{ゆき しろ やまなみ}雪をかぶった白い山並みだけです。

リブが^{おとうと}弟のアイバーに、「ここにいと、^{わたし}ノルウェーに私たちふたりしかいないみたいな^{きも}気持ちになるわね」と言いました。

するとアイバーが^{すこ ふあん}少し不安そうな^{かお こた}顔をして答えました。「^{ほんとう}本当だね。でもパパとママはもうすぐ^{かえ}ホーンフェルから帰って来るよ。ぼくたちも、もう^{かえ}帰ろうよ。」

アイバーはまだ^{さい}6歳です。リブも

^{さいしよ}最初はこんなに^{とお}遠くまで^{おとうと}弟を連れてくるつもりはなかったのですが、^{とお}遠くに見えた^{かんしとう}監視塔にのぼってみたいで、^{とお}ついつい遠くまで^き来てしまいました。

リブとアイバーは^{りようしん いっしょ}両親と一緒にその^{ちか やまご や}近くの山小屋に来て、^{きゆう す}休かを過ごしていました。^{りようしん すこ}両親が^{あいだ}少しの間出かけることになり、その^{あいだ}間ふたりでスキーを^{たの}楽しんでいたのです。リブはその朝、^{あさ かあ}母さんから、「この^{ちか}近くにはだれもないから、あなたはアイバーのことも^{めん み}面どうを見ないといけないのよ。12^{さい}歳なんだから、それくらいはできるわね」と言われていま

毛布



ドロシー・B・ルビー

した。

「リブは自分のおながが鳴る音を聞いて、父さんのことを思い出しました。父さんはスキーで出かける時はかならず食べ物を持っていきました。

「アイバー、このあたりに人はいないけど、生き物はいるみたいよ。」

「リブがちよっと足を休めて言いました。「見て、これねずみの穴よ。」

「ねずみって、どこにいるの。」

「雪の下に穴をほって、かれ草をした巣の中にいるの。」

「穴の中って寒くないのかなあ。」

「雪が毛布みたいに、暖かくしてくれるのよ、きっと。」

「リブはアイバーのぼうしが耳をおおうようにかぶらせ直し、「あの森をぬけて行けば、ずっと早く着けるわ」と森の方を指差しました。

そのうちに太陽が大分西に傾き、気温も下がり、雪が氷のように固くなってきました。スキーのすべりも前より早くなりました。

「お姉ちゃん、まだ着かないの。おながもペコペコだよ。」

「もうすぐ着くわよ。」

とはいうものの、リブも不安でした。森の所で方向をまちがえてしまったような気がしたのです。

「あの高い所まで登るわよ。小屋

の近くに^{ちか}あった湖^{みずうみ}が見えるかもしれ^みないわ」と^いいながら^{うしろ}後ろを^む向くと、
アイバーは^{つか}疲れたようす^とでまだ^{とこ}ずつと^{とこ}おくれた所に^いいました。

アイバーは^おようやく^つリブに^お追い付くと、^な泣きながら、「^{たか}あんな^{とこ}高い^{とこ}所まで^いで行けないよ。^いくたびれ^いちゃったよ」と^いいました。

「でも^{くら}暗^{たいへん}くなったら^{うえ}大変よ。上^おに着いたら^おチョコレート^おあげるから、^{かん}がんばって。」^{じぶん}リブは^き自分の^も気持ちを^いしずめるように^い言いました。

^{ちやうじやう}頂上^こからなら^{みや}小屋^{おも}が見えると思^おっていたのに、^いいざ^つついてみると、^{どこ}どこまでも^{どこ}どこまでも^{つづ}続く^{しろ}白い^{やま}山^みが見え^ませんでした。

リブは^{はんぶん}チョコレートを^わ半分^{おと}に^とやると、^{もう}もうひとつは^{ぽけ}ポケット^とに^ししまいました。^{あと}後^{ひつ}で^{よう}必要^{なる}になる^かかも知れない^{おも}と思^かったからです。

だんだん^ひ日が^{しず}沈んで、^{さむ}寒さが^{ひど}ひどく^なって^きます。^{からだ}体を^{うご}動かして^いれば、^{さむ}寒さは^{かん}感じ^ませんが、^{アイ}アイバー^はは^お大分^たつかれて^いる^{よう}です。^{かぜ}風も^で出て^きたので、^リリブは^{そこ}そこを^お降り^るる^ことに^しました。

リブは^{ぜつ}絶対^なに^泣くまいと^{じぶん}自分^いに^い言^い聞^かせながら、^{アイ}アイバー^がが^か転^ぶぶた

びに^お起こして^やり、^ススキー^ををは^かせ^直直^しました。

ようやく^{やま}山^{した}の下^つに着^{いた}頃^こには、^{だい}大分^ぶ暗^{くら}くなり、^{ゆき}雪も^ちちら^つついて^いま^ました。^{そこ}そこには、^ほほし^く草^お置き^ば場^があ^りました^が、^や屋根^とと^は柱^{だけ}だけで、^とと^ても^さ寒^さは^しの^げげ^そう^にも^あり^ません^でした。

アイバーは^{からだ}体を^{ふる}ふる^わせながら^{とき}時^{じま}時^{じま}しゃくり^{こえ}声を^あげ^るる^だけです。^ままるで^こ小さな^ねね^ずみの^{よう}で^した。

「そう^だだ、^ねね^ずみ^よよ、^ねね^ずみ。」^リリブ^がが^き急^にに^おお^おお^お大きな^{こえ}声^をを^だ出したので、^{アイ}アイバー^はは^びび^つつ^くくり^しました。

「アイバー、^ねね^ずみの^{いえ}家^{をつ}く^るる^から^てて^つ伝^つって。」^そそう^いいう^がが^{はや}早い^か、^リリブ^はは^{ゆき}雪^{のお}おも^いい^{はん}半分^{ゆき}雪^{なか}の中^にに^うま^っつ^ている^き木の^{えだ}枝^{した}の下^{あな}に^あな^をを^ほほ^りり^はじ^めめ^ました。^{ゆき}雪^をを^かか^ぶぶ^つた^{その}その^{えだ}枝^がが^ちち^よう^どど^あな^のの^やや^ねね^のの^{よう}に^なな^りり^ました。

「アイバー、^{そこ}そこに^ち散^らか^つつ^てる^ほほ^しし^く草^をを^もも^つつ^てて^来来^て。」^そそして^リリブ^はは^おお^とと^はは^ここ^がが^うう^んん^でで^ききた^ほほ^しし^く草^をを^ああ^なな^{なか}の中^にに^いい^れれ^ました。「^ささ^ああ^ここ^れれ^でで^いい^わわ。^ここの^す巣^{なか}の中^{はい}に入^るる^のの^よよ、^ねね^ずみ^みたい^にに。」

アイバーと^リリブ^はは^み身を^くく^ねね^らせ^なながら、^{あし}足^{から}から^あ先^にに^あな^{なか}の中^{はい}に入^っつ^てい



ました。でも寒さをしのぐために、穴をほってその中にいたことを話すと、父さんは笑い出し、リブもほっとしました。

テントを張って、その中でひと息入れてから、リブは父さんに、どうして自分たちのいる所がわか

きました。そう暖かいというわけはありませんでしたが、ほし草をふたのようにして上にかけると、何とか寒さはしのげました。

その内にアイバーはね息をたて始めました。どのくらいたった頃でしょう。かた固く氷のようになった雪の上を何かがすべってくるような音が聞こえてきました。リブは穴の中から頭を出して、外を見ました。するとすぐ近くに、頭にライトを付けた人の姿が見えました。

「お父さん。」リブは穴から飛びだしました。

「リブ。こんな所にいたのか。」父さんの声は怒っているように聞こえ

ったのかを聞きました。

「スキーのあとが雪の上に残ってたのさ。この辺に人がいるはずはないから、お前たちのだとすぐにわかった。もう少し時間がたったら、それも見えなくなってしまっただろうけどね。」

アイバーが眠ってしまってから、リブは小声で言いました。「お父さん怒ってる？こんなことしちゃってごめんなさい。」

すると父さんがやさしい声で答えました。「怒ってないから、心配しなくていいよ。確かにいいことではなかったけど、とにかく頭を働かせ、自分と弟の命を助けたんだからね。」

日本文化の研究に 一石を投じる 帰還宣教師たち

豊

かなな人格の香りと霊的なものを持つて訪れる若い宣教師たちの多くは、何の前ぶれもなく求道者の前から姿を消す。転任していくのだ。その時、求道者はふいに胸の痛みを感じる。心から彼らを慕い、彼らが確かに主のみ使いであったということをはっきりと知るのである。改宗者にとっても、改宗の機会を逸した人にとっても、

若い宣教師から受けた印象は終生、心から消え去ることのない刻印を残す。まさに「一期一会」を深く感じさせるものがある。

そうした多くの宣教師たちの何人かは、まるで偶然か奇跡のように、10年20年後の今、私たちの前に姿を現わす。彼らは伝道期間中に触れた日本の文化、宗教、政治、経済、学術に深い関心を持ち、人間としても霊的にもさらに成熟している。そして、彼らはそれらの研究を生涯の仕事としてもう一度日本に戻って来るのである。

私たちの身近な関西でも、中江藤樹研究のマーク・リドル兄弟、上田秋成研究のモーガン・ヤング博士、鴨長明の歌論研究のロジャー・トマス兄弟、熱学研究のクイン・

「上田秋成をしのぶ会」 で講演したモーガン・ ヤング博士 一京都一

去

る10月10日、京都市左京区南禅寺の隣にある西福寺で行なわれた「上田秋成をしのぶ会」（秋成研究会主催）では、モーガン・ヤング博士が招かれ、「秋成と私」という演題で講演した。60数名の出席者の多くは秋成研究の第一線の学者や愛好家たちであり、教会員も何人か集った。

ヤング博士は日本の怪談小説中、最も芸術性の高いものとされる上田秋成（1734—1809、江戸時代の国学者、小説家）の「雨月物語」「春雨物語」から、人間の守らねばならぬ心がまえや、愛情の大切さを説いて

宝石のような輝きをみせる秋成の文学を通して、秋成の人柄や人生観を一時間半にわたって熱っぽく語った。

ヤング兄弟はかなり多くの原文を次々と読み上げ、ことに、世間からよく理解されず「鬼々しき物狂い」といわれた夫秋成をいたわる妻たまの愛情あふれる日記に触れて、秋成の人生哲学を掘り下げていった。

その後の質疑応答の時間では、ヤング兄弟の印象的な研究のひとつが紹介された。一乗寺村の源太騒動に取材した上田秋成と建部綾足の作品の翻訳と研究である。それは江戸時代末期に起きた事件で、渡部源太が妹八重と共にいいなずけである本家の渡部右内の父団治を訪ね、玄関先で八重の首をはね三方にのせられて、初めて本家の玄関に入ることができたのである。芝居が上演された南座は大入満員となり、一乗寺村の人々は1カ月間も村を挙げて観劇に通つ

ブルースター兄弟がおり、続々と来日している。このほかに経験豊かな伝道部長として来る人々ももちろんある。

戦後の日本に伝道が再開されて38年、その規模と様相はすっかり変わり、今や成熟期に入りつつある。元宣教師たちは社会的視野を広め、専門的な経験を積んで、教会内だけでなく広く日本の一般社会に影響を与えつつあり、尊敬と評価を受けている。自国の優れた伝統と文化をかえりみる若者の少なくなった日本人以上に日本を理解し、研究に打ち込む彼らの姿が人々の注目を浴びるのである。それは教会の信仰に培われた誠実でつましく、わけても末日聖徒に特徴的な「繊細で熱心な」探求精神に基づ

いている。

今月号では、日本で活躍するこれらの帰還宣教師のひとりであるモーガン・ヤング博士（京都ワード）にスポットをあててみる。ヤング兄弟は日本での伝道を終え帰国してからブリテッシュ・コロンビア大学で学び、日本文学の研究（特に上田秋成の作品）で博士号を取得した。今年の春に、同志社大学の客員教授として招かれ1年の間京都に住まいを持って教鞭を執っている。一方、京都ワードにあっては流ちょうな日本語で福音の教義クラスの代理教師を務めるなど、帰還宣教師の面目躍如たるものがある。（取材協力：大阪北ステーキ部京都ワード部・川岸由人）

た。ヤング兄弟はこれを、星のめぐりの悪い若者たちの悲劇「ロミオとジュリエット」や「ウエストサイド物語」にたとえて紹介し、日本人に改めて深い感動を呼び起こすこととなった。（注：源太騒動は「春雨物語」

の中の『死首の咲顔』に小説化されている）

秋成研究会会長である廣江美之助氏（京大名誉教授、理博）が「人はいかに生きるべきか」といった人生哲学に触れた秋成の講演は初めて聞きましたと感激の面持ちで話され、なごやかな雰囲気の中に散会となった。

秋成の墓がある会場となった西福寺では、仏式に従って会が進められ、読経に続いて焼香があった。モーガン博士も会場の礼儀を重んじ、焼香したが、そこには宗派を超えて、排他的、閉鎖的な態度を避ける真の信仰者の自信と、謙遜な姿があり、人々に感銘を与えた。

また今回の「秋成をしのぶ会」を企画し、事務面で後押しした川岸由人兄弟（京都ワード部）は、献歌、献句の選者として参加した。



●西福寺での本堂で正座して講演するヤング博士 後方には彼の両親と家族も同席している。

「主は実に生きたもう」



モーガン・ヤング博士

今から21年前の昭和37年6月に北部極東伝道部の専任宣教師に召され、19歳で初めて日本の地を踏みしました。東京の伝道本部に着いて間もなく、当時の伝道部長であったアンドラス長老から面接を受けましたが、その時に次のように問われました。

「ヤング長老、あなたは何の疑いもなしにこの教会が真実であると証できますか。」

「教会が真実であると深く信じていますが、疑いは全然ないとはまだ言えません。」

「正直に答えたことはありがたいですが、あなたはただ『教会は真実であると思う』としか言えないかぎり、宣教師、つまりイエス・キリストの証人としてそれほど価値があるとは言えません。」

そのようにアンドラス伝道部長から強い調子で言われた私は、この勧告を自らに課せられた最初のチャレンジと考え、まずは証を強めようと発奮しました。やがて望んでいた証を得ることができましたが、決して劇的な経験によってではありませんでし

た。普通に言われるように聖典の学習や、断食と祈りによって、今まで漠然と抱いていた福音に対する疑問は知らない内に氷解していたのでした。その時に得た静かな証は今日まで続いています。

ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンは、示現の内にイエス・キリストと交わった後で、次のように証しています。「さて、この子羊に就きて為されたる様々な証の擧句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。」(教義と聖約76:22) これよりも優れた言い方を知らないのも私もこの言葉を借りてこれまで証を述べてきました。

私は日本に召されたその日から、言葉など少しも分からなかったにもかかわらず私と日本との何か特別なつながりを感じました。なぜかと聞かれても説明できないのですが、何となく縁があったとしか言いようがありません。

このことから私は一生、日本と関係のある仕事をしようと決心しました。その結果、私の人生は楽だったとは言えませんが、様々な面白い経験をしてきました。

25歳で旭川支部(現在の札幌ステークス部旭川ワード部)の長瀬美津子姉妹と結婚してからの15年間、研究や仕事の関係で3カ国、7つの都市、13軒のアパートや家に移り住みました。また現在所属している京都ワード部は9つ目のワード部です。どこへ行っても福音は同じであり、神様の豊かな祝福が変わらずにあることを妻といつも感謝しています。(カナダのビクトリア大学教授。文学博士。現在、同志社大学に客員教授として招かれ、来年3月まで1年間教鞭を執る)

岡山ステーキ部文化祭 —郷土色を織り込んだ 発表に200名が参加—

目 覚めよシオンの若者たち」をテーマに、9月23日(秋分の日)独身成人主催岡山ステーキ部文化祭が開催され、会場となった岡山ワード部に200名余りの人々が集いました。

団体発表の部では岡山ステーキ部の5つのワード部と5つの支部が参加しました。松江ワード部によるミュージカル「すばらしい旅」や津山支部の劇「日本昔話」、米子ワード部の「銭太鼓」など、それぞれがユニットの特色と郷土色を織り込んだユニークで素晴らしい発表が続きました。

また、個人発表の部では独唱やピアノ演奏など各地の会員の豊かな才能が披露されました。

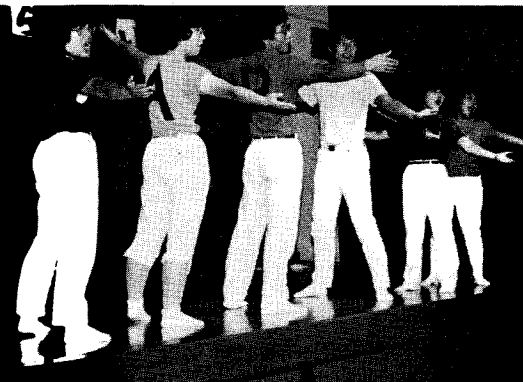
ステージで発表が行なわれている一方、

展示会場には、会員による自作の手芸、写真、空想図、書道、アートフラワーなどが展示され、訪れる人々の目を引きました。

文化祭の終わった後、姉妹たちの手により夕食が準備され、ダンスパーティーも行なわれました。

この度の文化祭は「一致」「親睦」「奉仕」「伝道」の4つを開催主旨として掲げましたが、今回の発表のために各ユニットが丸となって準備した成果があつて、当初の目的通りにユニットの結束を強め、交流を図ることができました。また山陽地方と山陰地方との親睦を深め、友達を招待して教会について知ってもらうよい機会ともなりました。

この文化祭を通して得た一致の大切さや奉仕の喜び、またそれからもたらされる祝福は、一人一人の心の中に貴い宝として残ることでしょう。(岡山ステーキ部文化祭実行委員：平野謙二)



●(写真左) 松江ワード部によるミュージカル「すばらしい旅」 ●(右) 津山支部の劇「日本昔話」(岡山ワード部に於て)

「僕と言葉」を書いた意図は、日頃耳が遠い不自由さを感じている私ですので、耳が遠いことの辛さ、苦しさを健康な人々に分かってもらおうとの気持ちで書きました。また、まったく聞こえない人の立場をも詩に託し、手話を通して奉仕している各地の手話サークルのみなさんへの感謝の気持ちも込めてこの詩を書きました。

私は、耳が遠いために、人とのコミュニケーションが円滑にできず、そのことがハンディとなって人間関係にも気疲れする日々が多くあります。教会に改宗するまでは成人しても飲むことのなかった酒・タバコを覚えるようになりました。私の生活は経済的には恵まれておりましたが、内なる思いは、最悪の状態にまで落ち込んでいました。酒やタバコなどの誘惑のために実を結ばない交際だけが広がり、気まじめな私の心をますます疲れさせるばかりでした。

ふとしたことから私は、以前に読んだ本の中に、信仰深く柔和でおだやかな信仰生活を送るキリスト者のことが書かれていたのを思い出し、近くの教会に出かけたことがありました。しかしその教会は私の心に描いていたような教会ではなかったため、しばらく教会のことを考えずに過ごす日が続きました。

そんなある日、休日に散歩をしていた私は随分と長い間会ったことがなかったといこに道で出会いました。幸いにも彼女が熱心な末日聖徒でしたので、彼女の話に興味を持った私は、誘われるままに次の週の地方部大会に参加しました。話された兄弟姉妹の証に深い感銘を受けた私は、この教会が真実であるとの確信を深め、レッスンを受けてその数カ月後にバプテスマを受けま

した。

これまで神様はいつも私を導いて下さいました。今度の大賞受賞についても神様の祝福を感じるのです。福音に改宗して生活を変えた私は様々な試練にも遭いましたが、いつも神様に助けられました。

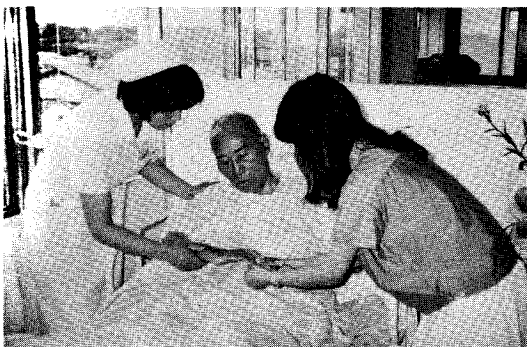
確かに神様が生きておられ、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であることを証します。(ひが・せいしん 30歳、沖繩支部伝道主任)

老人ホームを慰問して

—表彰されたボランティアグループ—

福岡ステーキ部久留米支部

安 息日の午後、老人たちの横たわるベッドに暖かい日差しが溶け込んでいました。そこでは時の流れが止まっているかのようです。でも老人たちは確かに呼吸をし、目も開いています。まるで子供のよ



●特別養護老人ホーム「若久園」で、窓拭きやツメ切り、対話を中心とした訪問を行なう久留米支部のボランティア。

うに僕らを見ているうつろな瞳がありました。

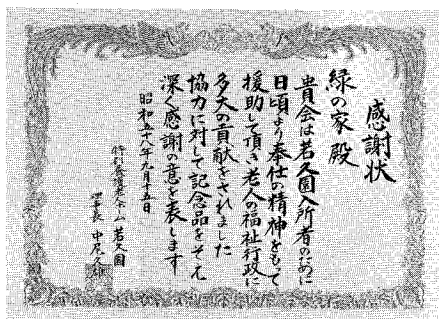
僕らが訪問した所は、若久園という特別養護老人ホームで、高齢の寝たきり老人を含む約150人のお年寄りがいます。

まるで自分の孫が来たかのように喜ぶ人たち。今までなかった希望という光が瞳のなかに輝いていました。手を握って離さないおじいさん、「また、来てね」と目に涙をためるおばあさん、中には合掌さえる老人もいます。彼らは変化のない毎日を一体どうやって過ごしているのだろうと考えた時、自分の今の生活がどれほど恵まれ、また貴重なものであるかを身をもって感じさせられました。

このような公共施設では一切の宗教活動が禁じられていて、教会の名前を出すことすらできません。それで私たちは今の支部が借りているビルが緑色ですので「緑の家」と命名したボランティアグループ名で独身成人を中心に20名ほどが集まって活動をしています。

子供のようなうつろな瞳に永遠の光をともしてあげたい、来世に関しての知識をあげたい。でも現状では難しいことです。いくなればそれは老人たちとボランティアの人たちの一時的なつながりと、その場だけのことのような気がしますが、「この世的なものであっても、これらの行為はすべてに浸透し、それらを促し、聖くしているものはすべて霊性である」と言われたマッケイ大管長の言葉にあるように、相互の霊的高まりと奉仕の業に聖らかな思いを得ることができます。

それが、去る9月15日敬老の日、同施設の慰問に対して感謝状を受け、表彰されました。僕たちは窓拭きやツメ切り、それに対話を中心とした訪問で、他にこれと言ったことは何もできなかったのに、このような形で感謝を受けるとは思いもよりませんでした。これも神様の祝福と思い、これを機により一層充実した活動を続けたいと思っています。(レポーター：久留米支部「緑の家」代表・仲井寿二郎)



● (写真左) 独身成人を中心とするボランティアグループ「緑の家」の人々。● (写真右) 9月15日の敬老の日、老人ホームの慰問に対して送られた感謝状。

私の母のバプテスマ

一田澤湯姉妹(89歳)の信仰一



●中村姉妹
(左)と田姉妹

神戸ステーキ部神戸ワード部

中村 芳子

です。なぜ母がいやだと言うのか、その理由を聞いても無言のままでした。一生懸命教えて下さる宣教師にも申し訳ないし、なぜなのか理由を知りたいとも考え、ここで一端レッスンを中断してお祈りをしてみましょうと母に話しました。

姉妹宣教師も断食をして祈ってくれました。また、私たちは毎日夜は10時に、朝は7時半に祈りました。私は母に次のようにイエス・キリストに従うことの意味を説明してみました。「これまで仏さん、お大師さんを信じてきたのはそれでいいけれども、おばあちゃんのために、全世界の全人類のために命を捨てて下さったのはイエス様ひとりしかいないですよ。イエス様は生きて生身をさかれ、十字架にかかって死んで下さったんです。私たちは今はそれを知りません。遠い昔の話だから……。私たちの遠い先祖が、そのようにしてイエス様を十字架につけたのですよ。」母は「ウ〜ん」と、うなずいて「生身をさかれて血を流して……。私は知らないけれども、遠い昔の私たちの先祖が殺したということは私にも血液の中にその罪が入っている」と言うのです。分かりましたかと聞くと、「分かった。バプテスマを受ける」と3日目にバプテスマを受ける意思表示をしてくれました。どうしてバプテスマを受けるのが嫌だったの

私の母は仏教徒であり、長い間仏教の言葉になじみ、その教えで生活してきたために、イエス様のことについては関心を持っておりませんでした。

私が昨年(1982年)の12月にバプテスマを受けて以来、私の一番の願ひは、母のバプテスマでした。夫もすでに亡くなり母とふたりだけの生活にあって、親子でありながら一緒に手をつないでイエス様の教えに従い、神様のみ前に行けないというのは非常な悲しみでした。しかし私にはどうすることもできないと思っていました。

今年に入って姉妹宣教師の訪問を受けましたので、母に次のように話してみました。「おばあちゃん、伝道する方が来て、神様のお話をやさしくして下さいらんだって。」すると母は「はい」とうなずくので、姉妹宣教師にレッスンをお願い致しました。母は長い間韓国で生活していたこともあって十分に日本語が通じなかったため、宣教師の言葉を私が韓国語に通訳致しました。一週間毎日のように宣教師からレッスンを受け、いよいよ最後のバプテスマの段になりました。順調にレッスンは進んだのですが、どうした訳か「バプテスマは嫌だ」と言うの

か聞きますと恥ずかしかったと言うのです。そのようにしてやっと納得した母は「イエス様がついてきなさいというからついていったらそれでいい」と言うほどにまで変わり、驚くほど素直にバプテスマを受けました。

今年の5月21日は、宣教師も私の母も共に喜びにつつまれた日となり、私はうれしくて涙があふれました。母はすべての事が分からなくても、ひとつの事が分かると、喜んで神様を信じ、イエス様について来るのです。什分の一のことで「イエス様のことなら何でもします」と言うのです。

私は母親だから子供は親の言うことは何でも従わなければならないといった向こう意気の強い母でしたが、今は子供のように素直になり、すべての生き物が成長できるようにして下さっている神様にいつも感謝しているのです。

親子が共に手をつないで教会に行ける喜びは何にも換えがたいものです。これまで導いて下さった宣教師の方々や兄弟姉妹の愛に深く深く感謝致します。(なかむら・よしこ 1914年生まれ)

喜びも悲しみも幾歳月

—伊豆大島での信仰生活—

町田ステーキ部 小田原ワード部

泉 満子

船

の安全のために、航路の標識となる仕事をしている夫と共に全国を回っています。灯台守の妻として、早いもので

もう22年たちました。灯台守の生活は映画やテレビで何度かドラマ化されましたが、私たちの生活もまったくそれと同じものでした。違うところは私が末日聖徒であることぐらいでしょう。

沖縄にいた時に福音を知り、バプテスマを受けて10年になります。その間にもいろいろな喜びや悲しみがありました。ほぼ3年ごとに北海道から沖縄まで転動し、今春から伊豆大島に赴任しましたので、安息日の前日より泊まり込みで集会に出席しています。千葉県館山にいた時は、最寄りの教会まで往復5時間弱かかりましたが、それでも陸伝いでしたので良かったのですが、今度は離れ島です。また、島の中でもはずれの岬の突端にある灯台はへき地です。狭く曲がりくねった坂の山道は木々に覆われ、まるでタイムトンネルをくぐり抜け大正時代にでも戻ったような錯覚にとらわれます。このような不便な所でも信仰生活を続けられることをうれしく思います。

神様は確かに生きておられ、この教会が主の真の教会であることを知っていますので、どんなに不便で遠くにあろうとも少しでも霊的に高まりたいと思い、教会に集います。小学校1年生の息子も、「神様のそばにいたい！サタンに勝つたい！」と言って、喜んで教会へ足を運びます。

主人が非教会員であるため、お互い譲り合って月に一度しか出席できませんが、快く出してくれますのでとても感謝しています。離島へ転動と決まった時も、「どこの教会へ行けば良いのか」と心配してくれました。大島からは数少ない定期便の船で熱海に出ます。初等協会の集会が行なわれている小田原ワード部に所属させていただきま

した。以前にいた千葉でさえ未開拓の所が多く、ましてや小さな島はさらにいろいろな面で遅れています。島の中で真の教会を知っている人がいないので伝道の必要性を強く感じています。

島には末日聖徒の教会がない代わりに、自然の恵みが一杯あります。一般的によく知られた山菜類はもちろんのこと、タンポポ、スマレ、ゲンショウコ、ハコベ、クサギ、アシタバ、ツユクサ、ツルナなど、食べられる野草が多く、天ぷらや和え物、つくだ煮にします。創世記1章30節、「命あるものには、食物として全ての青草を与える」の聖句の通り、青物は自然からのものを食べるように心がけています。山菜は苦勞して栽培しなくても、つま取って料理するだけの神様からの豊かな恵みです。

我が家では、保有性のある豆類、トウモロコシ、根菜類などを畑で作っています。灯台敷地内の草木を刈り取り根を起こし、1本の畝で100坪あまりを耕すのに2カ月かかりました。千葉では120坪を年間千円で

借りていましたが、当地ではただ、という大きな祝福を得ました。ムカデやマムシにおびえながらも、「開拓者たちの苦勞はこんな類のものではなかったはず」と頑張りました。今は野リスやカラスの被害をなくするための知恵比べに奮闘しています。草取りに追われながらも、畑で野菜が発育する様を見たり、収穫する時は、万物を作りたもう神様の愛と恵みと祝福を知ることができます。また、己の与える愛情の施し方によって作物の出来、不出来が決まることを知りました。

良い種子を実らせるための苦勞を例えて信仰も育てたいと思います。家庭菜園をしていますと、主の戒めを守ることの喜びが活力となります。また主人に対して、真の福音を理解してもらえるまではと家庭内における伝道も私を強くしております。

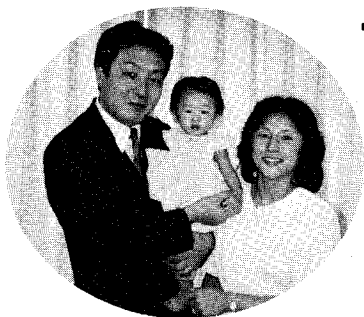
島での試練を祝福として、「灯台の明りよりも、もっと大きな光になりたい。」主人の改宗に幾歳月がかかろうともあきらめません。主の愛を信ずるが故に。(いずみ・みつこ)



編集室から



●「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などの原稿をお送り下さい。また、今月号を読まれての感想文、あるいは本誌の具体的な活用例を編集室あてにお寄せ下さい。「読者のひろば」などで紹介します。2月号掲載分締切は12月15日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。



世界旅行で体得した 福音の原則

東京南ステーク部東京第1ワード部

ワールドコイン自営 長妻 龍哉

今から4年前、現在の仕事を始めるために下準備として世界旅行に出かけたことがあります。欧米を中心に世界各地のコインのオークションに出向いて金銀銅貨、または日本の大判小判といったアンティークな貨幣を競り落とし、日本に持ち帰って、デパートや古美術商、宝石商などに卸すのが私の仕事です。4年前の初めての世界旅行は香港を皮切りに50日間で十数カ所を回りました。

インドを出てこの旅で最も印象に残るイランの首都テヘランに向かった時のことです。私は日本を発つ時イランの情勢について何も知らされておらずでしたので、革命後3カ月だと知らぬままガイドブックを手にテヘランに降りました。

到着後、米ドルをイランのお金リアルに替え、いつものように市内のホテルを予約するために飛行場のカウンターに行きました。私の指名するホテルはすべて満員という意味だと思ったのですが、ただないと言われました。予定していたホテルは砲撃により破壊されたことを後で知らされました。

翌朝町に出てみると瓦礫の山が至る所にあるのです。そして、ウィンドーにはホメ

イニ氏の写真が町中に飾られ、そのほか、革命のむごたらしいポスターが所構わず張り付けられていました。私はやっと自分が今、警察と政府機関がまったくない無政府状態の中にいることに気づいたのでした。

ガイドマップに出ている通りの名前を人人に尋ねると、皆青い顔をするのです。私の持っていたガイドマップの名前は以前の王パーレビの名がついていたからです。私はすぐにここに長居をしてはならないと判断しました。そして運命の出発の日が来ました。

私は出発の日には町のブラックマーケットで全財産、つまり米ドルをすべてイランのお金に5割増しという大きいレートで替えました。飛行場より5割増しのレートで替えることができたので飛行場で戻せば割増が増えて戻るのはないかという浅ましい素人考えがありました。

飛行場の両替のカウンターで札束を出すと、その係員は苦笑いをしながらイランのお金は革命後、どこの国のお金とも両替できないと言いました。私はひざから力が抜けていくのを感じました。ではこのお金はどうなるんだとその係員に聞くと「紙屑になるかこのイランで全部使ってしまうかのどちらかだな」とたどたどしい英語で軍隊調に言うのです。私は緊迫したその中で

札束を握りしめ床にたたきつけてしまいました。「なんてことだ！」私は興奮の極度に達していました。

辺りが騒然とした中で我に返り、そのお金をさっとかき集めるとその場を通り抜けて飛行機のカウンターに行きました。そこではまたもや私の弱い信仰をまったくなくしてしまうような返事が返ってきました。満席であり、イラン人優先であると言われたのです。私はパンナムの便に予約があり、ヨーロッパで仕事が残っていると興奮気味に言っても聞く耳を持たないという風でした。そのうちに何百人ものイラン人がカウンターに集まり、列も作らずに我先にとチケットを出していました。私は何回も席があるか尋ねましたが、ただそっけなく「空席はありません」と言うのです。

もうすでに戒厳令がしかれている町にブラリと出れば、アラビア語で呼び止められ、3回言われて止まらなければあつというまに撃ち殺されるということを知らされてきました。そのために飛行場から出ることもできず、夜中の3時になるというのに途方に暮れたままモルモン経を数時間読みふけていました。飛行機の席が欲しいという一心でモルモン経を読みあさり、苦しい時の神頼みが始まったのです。

私は通行人などかまわず、ひざまずき熱心に何度も何度も祈りました。しかしパンナムの係員はただ「空席はありません」と言うばかり……。しかし私の心の中に、ここで待ちなさい、飛行機に必ず乗れるという思いがありました。それが自分の楽観的な考えなのか、聖霊のささやきなのかはつきり分かりませんが、私は弱い信仰ながらもそのささやきを信じていました。

やがてパンナムの飛行機の出発が迫った頃、場内アナウンスがあり、みんなチケットを出して乗ってくれとのことでした。次の飛行機は2カ月後だと知らされた時、震えにも似た気持ちを覚えました。

いつも旅行の時にはモルモン経を携えていき、空き時間に読み続けているのですが、この時もすがりつくようにして読んでいた所に、あきらめずに常に祈れとありました。しかし、祈ってもどうにもならない時もあると思ったりもしました。目に涙さえ浮かべ、紙屑になったお金を握りしめた時、天井の方からいつも聞き慣れた私の名が呼ばれました。「ナガツーマ、ナガツーマ、You get a seat. (席が取れました)」最後の席が私に与えられたのです。

私は人々がひしめき合っているイランの通関を一目散に走りぬけようと人の山をかき分け、引きずるように荷物を持って慢心の力で飛行機のタラップをかけ上がりました。弾む息も落ち着いて周りを見ると、人人は今まで何事もなかったかのように笑いと音楽に酔っていました。「別世界だ。別世界だ」と私は何度もつぶやきました。主にひたすら感謝しながら、ヨーロッパへと向かいました。その後、無事ロンドンに着き、イランのお金も安くはなりましたがポンドに替えることができました。

私はこの経験を通して、また、これまでの仕事を通して教会でいつも聞かされる簡単な福音の原則が胸に刻みつけられました。「安息日を守る。聖典を読む。絶えず祈る。」このなんでもない、なんだというようなことが、ピンチに陥った時に私を何度救い出してくれたことでしょう。

私は年に何度も海外に出ますが、日曜日

は必ず教会に行くようにしています。神権会や聖餐会に出席し、たどたどしい英語で証をします。「安息日を守り、聖典を読み、絶えず祈る」というこの証はどこにあっても人々に感銘を与えるのは事実のようです。

この仕事を通して4年間、何度も主に助けられました。私の祈りを主は一番良い方法で聞き届けて下さいました。私にとって仕事と信仰は切っても切れない間柄になっています。いつもひとりで旅をする時、リーハイやニーファイ、アルマ、そのほか多くの予言者が目をつぶると私の側に立ち、私を困難な状況から抜け出せるように導いてくれるのです。

若輩な私が自分にとって最も理想とする職業に就き、日々の糧を得られることを心から主に感謝しています。(ながつま・たつや 1953年生まれ、東京第1ワード部第一副監督)

真実の教会を求めて

—神様の限りない愛と
赦しの奇跡—

釧路地方部網走支部
森越 いつみ

私 が中学生の頃、遊びに行った担任の先生のお宅で、とても大事そうにイエス様のカードを見せて下さったのがきっかけとなり、キリスト教に興味を持つようになりました。そしてキリスト教は一番正しい宗教であると心の中でひそかに信じる

ようになりました。

大人になってからは、いろいろな教会へ行きました。またキリスト教の幼稚園に勤め、神様を本当に信じていました。けれども、どの教会に行ってもあまり満たされず、またキリスト教の幼稚園に勤めて、様々な事を見聞きしたことからいろいろ疑問を覚え、納得のいかないものを感じるようになりました。

そのような状況にありながらも、真実の教会というものが、どこかにあるのではないかと思い始めたのです。その時、私はとても真剣になって祈り求めました。「もしこの世に真実の教会というものがあるのですしたら、どうか示して下さい。神様から御覧になって一番正しい教会というものがあるのでしたら教えて下さい。」この祈りを神様はすぐに聞き届けて下さいました。

間もなく外人の方が見えました。一見してすぐにモルモン教の方々だと感じました。モルモン教はキリスト教も教えているらしいがモルモンの教えであってキリスト教会ではないのだという近所うわさの噂を信じ込んでいたので玄関先で断わってしまいました。(「末日聖徒イエス・キリスト教会」という正式の名前があることをそれから3年たって初めて知りました) それでも、その宣教師たちを見て、とても誠実な方であると強く感じました。近所の人が噂していたのとは随分違っているので、きつねにつままれたような気持ちでいました。宣教師の方々は何か考えているように首をかき上げて帰っていかれましたが夜になってもう一度見えました。また次の日も見えたように記憶しています。「お話を聞いてみたい」という思いにかられたのですが、真実の教会と



●中列右側が森越いづみ姉妹、前列のふたりの子供は、森越晴信さんと千晴ちゃん。

いうものはどこか遠い所にあるに違いないと考えていましたので断わり続けていました。まさかこれほど身近な所にあるとは思ってもいなかったのです。ましてや、こんなに早く祈りが聞き届けられようとは……。また、主人に対する遠慮もありました。

そんな訳でそのまま3年近くもたってしまいました。ある日のこと、娘が家の近くのある教会を指して「教会に連れて行って」とせがんだのです。私は困ってしまい「お母さんは今、どこの教会に行ったら良いのか分からないからもう少し待って。そのうち連れて行ってあげるから」と言い、娘のためにも再び真剣に真実の教会を求めて祈りました。

すべて御存じの神様は今度は主人が宣教師と出会うように導いて下さいました。主人は街を歩いていて前の方から歩いて来た宣教師とぶつかりそうになったことから知り合いになり、住所と名前を教えたのだそうです。それによって主人が宣教師を連れて来たことになり、主人に遠慮することなくお話を聞けるようになりました。

そして、ようやく神様が真実の教会を示して下さいたのではないかと気づき始めました。ところが、この教会に対する様々な悪口を集中的に聞かされてしまい、そのためショックを受けて具合が悪くなってしまふほどでした。その時、思いがけなくも宣教師が来て、いろいろなパンフレットを下さいました。それには私が知りたいと思っていた事柄がほとんど書かれてありました。私は悪口なんか、もうどうでもよいと思いました。それでもなかなか確信が持てずに悩みました。

考えあぐんだ末、真剣になって祈る決心をしました。その時の祈りは、これまでにない、とても真剣なものでした。

「モルモン教会というのは私が祈り求めていた真実の教会なのですか。本当に神様が私の祈りを聞いて示して下さいた教会なのですか」と、一生懸命神様にお聞きした後、私は新約聖書を手にとって読み始めていました。マタイの福音書第7章9節が突如としてとても力強く私の心に迫ってきました。(私はそれまでも何度か、この箇所は読んだことがありましたが、この時ほど力強く心に迫ってきたことはありませんでした)

「あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があろうか。

魚を求めるのに、へびを与える者があるか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っていることとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるか。」

読み終えて、私は涙が止まりませんでした。本当に真実の教会があったのです。それもこんな身近な所に。神様は本当に生きていらっしゃったのです。夢のようなことが現実のものとなりました。神様がこのような私を忍耐強く変わらぬ愛をもっていつも導いて下さっていたことを思うと本当に感謝の気持ちで一杯になります。

私は1980年の9月28日にバプテスマを受けましたが、その時、持病の不整脈のために心臓が少し弱っていました。灯油がきれてバプテスマのための水を温めることがで

きないと聞かされた時は、少し不安を感じました。「心臓マヒ」という言葉が脳裏をかすめました。心臓の弱い者が網走の痛いほど冷たい水に耐えられるだろうかと思ったのです。

ようやく受けられるようになったバプテスマですから今の機会を逃すと、もう受けるチャンスがやっこないかもしれないという不安の方がもっと大きく、私は主を信頼してバプテスマに臨みました。私は大きな罪がありましたから、これまでの罪を赦して頂けるならここで死んでもかまわないと思いました。バプテスマの水で人が死ぬのを主はほっておかれるはずがないと思いました。

バプテスマの水に沈められた時、私はこれまでの罪を赦して下さるように必死で祈りました。その時私は確かに目をつぶって

JMTC 第51期生 第52期生



いたはずなのに、とても清らかな透き通った水が私の上を覆っているのを見ました。

水から上がった時は、冷たい水のために、すぐに呼吸ができなくてとても苦しく、どうなることかと思いましたが、次の瞬間奇跡が起きました。全身が燃えるように熱くなり、とても気持ちが悪くて、平安な気持ちで満たされたのです。そして持病の弱っていた心臓がその時すっかり癒されました。

その日の夜、ひとりでじっと考えていると、神様が私のそれまでの罪を赦して下さったという実感が湧いてきて感謝の気持ちで一杯になり、涙が止まりませんでした。

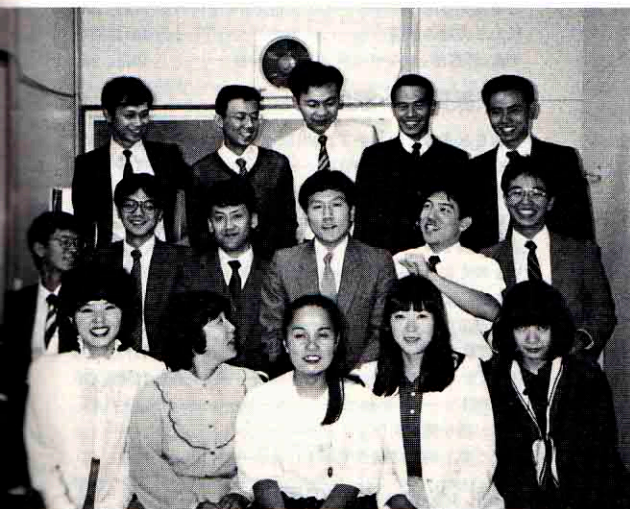
私は、この教会を知るようになるかなり前にこんな夢を見ました。夢の中で私は行ったこともない教会にいました。その教会がとても好きになり、そこにいる人たちの

仲間に入れてもらいたいと心から思いました。ところがその時、「今までの罪を告白しなければ仲間に入れることはできない」と告げられたのです。その人たちの後ろの方にはバプテスマのための水があったようでした。私は夢の中で本当に悩んでしまいました。今までの罪を人に告白することはとても恥ずかしいことだったからです。

夢から覚めても私は何かしら不安な気持ちが残りました。もしこのような教会が本当にあるとするならどうしたらよいのかと悩みました。その夢も今や現実のものとなったのです。

神様の限りない愛と導き、そして赦しの奇跡にあずかり、心から感謝しています。

(もりこしいづみ 1948年生まれ、網走支部日曜学校教師)



●(写真左) 8月に召された日本人宣教師18名。8月9日から17日までトレーニングを受けた。

●(右) 9月に召された16名。9月20日から28日までの9日間、トレーニングを受けた。

工ホバ天地の主
真理のべて
果てから果てまで
広めたまえ
人がみな み名を
知る時まで
(讚美歌104番)

聖徒の道

索引

1983年 1月～12月
第27巻第1号～第12号

☆愛

すべての人を愛しなさい(ヘイト)……………	1月 14
神様の愛……………	4月 17
福音と恋愛……………	6月 31
「愛をもって互いに仕えなさい」(ペリー)……………	8月 36

☆イエス・キリスト

7人のキリスト(マッコンキー)……………	1月 54
「わが喜ぶ愛子を見よ」(リー)……………	1月 132
復活の証樹(ハンター)……………	7月 25
創り主、救い主(ピーターセン)……………	7月 110
イエス、完全な指導者(キンボール)……………	8月 7
「かねて言われたとおりに、よみがえら れたのである(ヒンクレー)……………	9月 1
キリストと創造(マッコンキー)……………	9月 30
神の御子(キンボール)……………	12月 2

☆音楽、讃美歌

未日聖徒の讃美歌——音楽による礼拝 (リチャーズ)……………	1月 37
-----------------------------------	-------

☆教師

教師——その大いなる召し(バラード)……………	7月 119
-------------------------	--------

☆人生

神への感謝(ロムニー)……………	1月 86
成熟の意味(カスパート)……………	1月 95
決意の時は今(ハンター)……………	1月 100
清い信心(アシュトン)……………	1月 112
喜びをもって生きなさい(マックスウェル)……………	1月 117
忘れ得ぬ夏……………	2月 9
「もしラッパがはっきりした音を出さないなら」……………	2月 22
小さな粘土細工の羊……………	3月 8
奉仕の喜びを味わう……………	3月 36
「堅物」だっていいじゃないか(バンガーター)……………	3月 29

バランスを保つ……………	4月 27
かけがえのない時……………	5月 28
日曜日のクリームサンデー……………	6月 6
祝福師の祝福(ファウスト)……………	6月 26
「この世に輝いている」(マックスウェル)……………	7月 14
人生のドラマにおける雄々しき(デリック)……………	7月 40
実生活の中のゴリアテに打ち勝つ(ヒンクレー)……………	7月 86
匿名(モンソン)……………	7月 96
自分自身が何者であるかを知る(ブラウン)……………	7月 106
自由意志と規制(パッカー)……………	7月 115
冒瀆と不敬(ブルーアートン)……………	7月 125
霊的成長を目指して(ディエガー)……………	7月 129
日々の恵み……………	8月 14
霊的向上のための10の提案……………	8月 23
幕のかなたより……………	9月 20
私の時間……………	9月 23
今の姿……………	10月 18
6日目の奇跡……………	10月 19
熊の足跡……………	10月 30
証を思い起こす……………	11月 28
思いがけない客人……………	12月 11
ババリアでの思い出……………	12月 12
あの安息日……………	12月 20

☆改宗談・伝道

神のみ言葉……………	2月 13
「高慢と偏見」……………	2月 36
1日1個のりんご……………	5月 46
新たな心を与えてくれた人々……………	6月 9
心を変える……………	8月 38
私たち夫婦の伝道……………	10月 24
それは「西部」から……………	10月 26

☆家族関係・家庭

家族を永遠のものとするために(ベンソン)……………	1月 104
私たちの結婚を救った原則……………	3月 10
両親を敬いなさい(ピノック)……………	3月 26
思いやりある伴侶になる……………	5月 11
家庭生活を豊かなものにする(ファウスト)……………	7月 74
子を教えよ(ペリー)……………	7月 133
より良い父親となるために……………	8月 16
子供の自尊心を養う……………	9月 14
教会での子供たち……………	11月 39
眠っている子供、泣いている子供……………	11月 40
また廊下……………	11月 43
子供が話を聞く助けをする……………	11月 44
子供たちと前列に座ってみました……………	11月 46

☆悔い改め・赦しの原則

悔い改めの福音(キンボール)……………	3月 1
---------------------	------

悔い改め(ハワード).....	7月 101
赦しは神から(バートン).....	7月 122

☆啓示

啓示.....	12月 29
---------	--------

☆質疑応答

食糧貯蔵とIIIニーフай13:26の矛盾?.....	3月 16
教義と聖約107:36(ステーキ部高等評議員 の持つ権能について).....	3月 18
証について子供に何を教えたらいのしょう?.....	4月 14
キリストの降誕は4月6日?.....	4月 15
貧困の不幸を和らげるための活動.....	5月 7
国際伝道部について.....	8月 12
監督,定員会会長,ホームティーチャーの役割.....	9月 11
聖餐は右手で取らなければならないのか.....	10月 22
末日聖徒はクリスチャンでないと言われた時に.....	11月 8

☆神権・定員会

「監督たる者は責められる点がなく」(ペリー).....	1月 49
アロン神権者の活発化.....	1月 60
僕たちの活発化.....	1月 64
アロン神権者に新たな活力を吹き込む (バックマン).....	1月 66
息子の心を備えよ(ピーターソン).....	1月 72
アロンの神権(ヒンクレイ).....	1月 76
神の神権(ロムニー).....	1月 82
高貴なる世代(ラーセン).....	7月 61
手の届く範囲に.....	7月 67
汚れた足と白いシャツ.....	7月 71
神権者への召し:「わたしの羊を 養いなさい」(ベンソン).....	7月 80
生い立ちを語る.....	8月 21

☆信仰

信仰——生きる力(ピネガー).....	1月 41
主イエス・キリストを信じる信仰.....	5月 34

☆人物

リグランド・リチャーズ.....	2月 24
戦士ポインティング・アイアの聖餐式.....	2月 34
タナー副管長逝去さる.....	2月 60
コーディネーの夢.....	3月 32
セブで見つけたもの.....	4月 20
心臓外科医ラッセル・M・ネルソンと従順.....	4月 31
エロール・ベネット (タチチサッカー界のスター).....	5月 17
奉仕の召し.....	9月 30
素晴らしい冒険(イレイン・キャンソン).....	11月 30
モルモン経の登場人物とジョセフ・スミス.....	12月 14

☆聖餐

主のみ名を受ける.....	4月 6
聖餐(ヘイト).....	7月 20

☆聖典

「私の身も心も聖文を喜ぶ」(クラーク).....	1月 19
聖典(バックナー).....	1月 90
聖典の中の女性たち.....	6月 23

☆聖霊

あなたにとって聖霊とは.....	8月 30
主のともしび.....	10月 35

☆総大会・一般

第152回半期総大会報告.....	1月 2
主は義を求めておられる(キンポール).....	1月 4
羊に命を得させる(ヒンクレイ).....	1月 8
信じる人と行なう人(ピーターセン).....	1月 24
教会役員の支持(ヒンクレイ).....	1月 29
神に心を向ける(リーブ).....	1月 45
高価なる真珠(ファイアンズ).....	1月 108
救い主の友,僕,息子となる(ウエルズ).....	1月 123
いかにかすかな光であろうと (フェザーストーン).....	1月 127
愛と親切の手を差し伸べよう(ヒンクレイ).....	1月 137
与えられた勧告を實踐する(タナー).....	1月 141
第153回年次総大会報告.....	7月 1
教会役員の支持(ベンソン).....	7月 6
主はまどろみも眠ることもされない (ヒンクレイ).....	7月 7
一致(ロムニー).....	7月 29
1982年度統計報告.....	7月 33
教会監査委員会報告.....	7月 35
王国の鍵(マッコンキー).....	7月 36
根と枝を残すために(レクター).....	7月 44
イエス・キリストの福音と人の本質的な必要 (バラモア).....	7月 48
予言者を受け入れる(ダン).....	7月 52
すぐに従う(アシュトン).....	7月 54
「善を行うことをおそれるなかれ」 (ヒンクレイ).....	7月 138
個人と家族の自立を強調した指導者会.....	7月 141
1日1章.....	7月 145

☆大管長会メッセージ

「自分の命を救おうとする者は」(ヒンクレイ).....	2月 1
悔い改めの福音(キンポール).....	3月 1
ペテロは外へ出て激しく泣いた(ヒンクレイ).....	4月 1
救い主の教えに従う(タナー).....	5月 1

全力を尽くす(キンボール).....	6月	1
自分が何者であるかを心に留める(タナー).....	8月	1
「かねて言われたとおり、よみがえられたのである」(ヒンクレー).....	9月	1
決意と献身(ロムニー).....	10月	1
知識を知恵に(ロムニー).....	11月	1
1983年クリスマス・メッセージ(大管長会).....	12月	1
神の御子(キンボール).....	12月	2

☆知恵の言葉

「約束を有てる原理」(ベンソン).....	7月	92
150年前に授けられた健康の律法.....	11月	13
タバコ、アルコールを幾つかの病気との関連性から考える.....	11月	16
現世の生活にかかわる律法と主の民.....	11月	18
知恵の言葉とそのガン予防上の効果.....	11月	21
人生を変えた知恵の言葉.....	11月	23
サッカーと知恵の言葉.....	11月	25
私がコーヒーをやめるまで.....	11月	26

☆伝説・考古学上の発掘

アンデスのインディオに伝わる洪水伝説.....	10月	48
エゼキエルの「木」.....	12月	22

☆福祉

明日に備える(ブラウン).....	1月	143
教会福祉の原則の応用——家庭における様々な問題を解決するための鍵(スミス).....	1月	149
家族が共に働くことによりもたらされる祝福.....	1月	154
経済的な試練に立ち向かう人に与えられる祝福(ファウスト).....	1月	158
日の光栄に至る自立の本質(ロムニー).....	1月	164

☆扶助協会

新しい時代の扶助協会.....	3月	20
-----------------	----	----

☆ボーイスカウト

「走れ、少年よ走れ」(モンソン).....	1月	32
-----------------------	----	----

☆ホームティーチング

批判に対処する.....	2月	16
ホームティーチングという名の伝道活動.....	6月	15
人の値.....	10月	7
あるホームティーチャー.....	10月	15

☆モルモネード

逆境はあなたを強くする.....	2月	47
はい、あなたの1000人です.....	3月	15
今日、福音を分かち合しましょう.....	5月表	3
負けないで.....	9月	45

うわさ話.....	10月	53
モルモネイズム.....	11月表	3
断食.....	12月表	3

☆子供のページ

こころのうた.....	2月	48
ひふでわかるってすばらしい.....	2月	52
わたしのお友だちへ(クック長老).....	2月	54
せいさん.....	2月	58
わたしのお友だちへ(スミス姉妹).....	3月	39
トロフィー.....	3月	44
おもちゃばこ.....	3月	49
主はよみがえりぬ.....	4月	38
コマドリはてんごくへいくの.....	4月	41
おにいちゃんのために.....	4月	44
一番大切なこと(ブッシュ長老).....	5月	53
しんこうってなあに?.....	5月	58
エリヤと神の力.....	5月	62
もちりんチュー.....	6月	38
予言者の力(ヒラマン10, 11章より).....	6月	44
ふくいんクイズ.....	6月	48
小さなお友だちへ(ハンター長老).....	8月	42
ぼくは、もう大きいんだ.....	8月	46
ぼくのにつき.....	8月	50
てんをむすんでみましょう.....	8月	53
これを持ってお行きよ.....	9月	46
エリヤって、どんな人.....	9月	52
まちがいがし.....	9月	56
どうすればいいの?.....	9月	57
小さなお友だちへ(ヤング姉妹).....	10月	54
どうしてだんじきにちようびがあるの?.....	10月	58
ちえのひも/ワカサギつり.....	10月	61
すくいぬしのあいまなびましょう.....	10月	62
小さなお友だちへ(ダン長老).....	11月	49
せいしよにでてくるきょうだい.....	11月	53
おれないぼうき.....	11月	54
すばらしいおくりもの.....	12月	42
ジョセフ兄弟.....	12月	45
雪の毛布.....	12月	48

☆ローカルページ

日中友好の花「日本と中国の会員の集い」.....	1月	172
「あっ! 慎吾ちゃんだよ」 ——我が子の成長記録がテレビに.....	1月	184
収集家による貴重な発見 ——ジョセフの母親の手紙.....	2月	66
名古屋テレビ主催交通遺児チャリティーに協賛.....	2月	68
関東地区9ステーション部合同 「セミナリーグランプリ」.....	2月	70
科学的なお灸でアカデミア賞(稲垣篤一兄弟).....	2月	80

世界初の人工心臓移植は靈の経験であった……………	3月	50
発見されたマーテン・ハリスの手紙……………	3月	52
リブランド・リチャーズ長老逝く(96歳)……………	3月	54
第2回クリスマスミュージカル(旭川・札幌)……………	3月	55
室蘭西支部設立……………	3月	58
阿南支部長の死を通して……………	3月	59
TDC 移転のお知らせ……………	3月	62
大阪北ステーク部池田ワード部教会堂……………	3月表	3
札幌にソルトレーク神殿を建てる!……………	4月	59
関東地区学生協会主催学生セミナー開かる……………	4月	60
東京インスティテュート第1回卒業式……………	5月	65
インスティテュートで学び、生活を 変えている兄弟姉妹たち……………	5月	65
増築完成なる神戸ステーク部西宮ワード部……………	5月	76
その響きは全地にあまねく(JMTC)……………	6月	50
桃太郎を目指した40人の若者 (名古屋ステーク部)……………	6月	52
「健康を考える」(福岡ステーク部伝道集会)……………	6月	53
支部新聞とパソコンの活躍(日立支部)……………	6月	63
新築竣工スナップ (東京南伝道本部・小塚ワード部教会堂)……………	6月	64
新伝道部長の紹介 (ブロック、パッカ伝道部長)……………	7月	146
第6回エメラルドの祭典(高松ステーク部)……………	7月	149
23番目のステーク部岡山に誕生……………	7月	150
BYU ヤングアンバサダーズを 招いたファイヤサイド……………	7月	151
丹羽三吾兄弟逝去さる……………	7月	152
資材管理部渋谷ブックセンターオープン……………	7月表	3
使用済み切手で愛の手を……………	8月	56
末日聖徒初の市会議員挑戦記 (大阪北ステーク部)……………	8月	58
4日間の神殿参入ツアー(札幌西ステーク部)……………	8月	60
ぞくぞくと召される日本人宣教師 (名古屋西ステーク部)……………	8月	63
シオンのつわもの29名(JMTC)……………	8月表	3
末日聖徒の女性、全米ヤング・ マザー・オブ・ザ・イヤーの荣誉に輝く……………	8月	58
末日聖徒の宇宙飛行士、来年秋、 シャトルに乗船……………	9月	59
渡辺ステーク部長「第8回発明大賞」受賞……………	9月	59
第2回大山指導者会開かる……………	9月	62
両手を待ちつつ JMTC 第49期生35名)……………	9月	72
東京渋谷インスティテュート、渋谷ビルに移転……………	9月表	3
獻堂されたサモア・船越とトンガ神殿……………	10月	66
「シンドレラのよきな気持ちです」……………	10月	67
ロバートソン伝道部長逝去……………	10月	68
東京東ステーク部センター獻堂される……………	10月	69
東京北、東ステーク部 合同マーカーコンファレンス……………	10月	70

神のみ業に進んで(JMTC 第50期生20名)……………	10月	79
東京東ステーク部センター……………	10月表	3
第1回 LDS スカウトラリーに 全国から400名が参加……………	11月	60
初等協会音楽発表会(佐世保支部)……………	11月	61
日本文化の研究に一石を投じる宣教師たち……………	12月	52
「上田秋成をしのぶ会」で講演した モーガン・ヤング博士……………	12月	52
岡山ステーク部文化祭……………	12月	55
わたぼうしコンサート全国大会で 文部大臣奨励賞を受賞した比嘉誠伸兄弟……………	12月	56
老人ホームを慰問して(久留米支部)……………	12月	57
JMTC(第51期生・第52期生)……………	12月	66

☆私の証

新星日本交響楽団のバイオリニスト ロイス・ジョンソン姉妹の証……………	1月	170
神殿と私(渡部正雄)……………	1月	173
ガンの宣告を受けて(木村梅子)……………	1月	175
福音を生活の中に取り入れる(橋本康子)……………	2月	71
私を改宗させたもの(石川康弘)……………	2月	76
2マイル行くこと(河村美穂)……………	3月	56
ある家族の改宗の手助けをして(三樹世津子)……………	3月	60
管理人として思うこと(斉藤勉)……………	4月	61
従順を学んで(浜田光)……………	4月	63
信仰と編物と喜び(浜田王香)……………	4月	64
モルモンパイオニア(杉山雅俊)……………	5月	67
母からの知らせ(吉田美恵子)……………	5月	69
迷える小羊に注がれた光(高遠昌代)……………	5月	71
こどものひろば(工藤志緒、奈緒、美緒)……………	5月	78
模範による改宗(中尾雅子)……………	6月	54
家庭は小さな天国(木村研一郎)……………	6月	56
我が家の変化(高遠茂)……………	6月	58
互いに愛し合い、任え合うなら…(シゲキ・牛尾)……………	7月	147
私の心は素晴らしい思い出で一杯です (ポーター)……………	7月	148
生けるキリストの証(菊池文治)……………	7月	154
我が家の10年目の改宗(加藤啓一)……………	7月	156
信仰の自由と音楽(チェネック・J・ヴァルバ)……………	7月	158
母の旅行かばんの中から(佐々木由香)……………	7月	160
神様からのプレゼント(上地喬子)……………	8月	61
祖国、韓国に召され(李登美子)……………	8月	63
私を導いて下さった姉妹宣教師 の死に思う(石王恵子)……………	8月	65
死と隣合わせた私(岸順之助)……………	8月	67
「わが為すことには深き 知恵あればなり」(高瀬由利)……………	9月	63
エライジャのみたまに助けられて(安藤嘉章)……………	9月	65
永遠の伴侶との出会い(西川敦子)……………	9月	66
結婚や仕事に先んじて(新田元一)……………	9月	68

神様の愛とみ守りを満身に受け(古鉄英治).....	9月	70
仏教からキリスト教へ(前田美代栄).....	10月	72
「あなたの手に善をなす力が あるならば…」(金子延子).....	10月	76
胸を熱くした「聖徒の道」(石田タエ).....	10月	77
中国伝道に向けて(小針彰彦).....	11月	62
異国の地(台湾)に召され(丹羽敦).....	11月	64
日本語と中国語の伝道(土持博徳).....	11月	66
子供を育てる喜び(錦沢ヤス).....	11月	67
「主は実に生きたもう」(ヤング博士).....	12月	54
心の渴きを癒した福音(比嘉誠伸).....	12月	56
私の母のバプテスマ(中村芳子).....	12月	59
喜びも悲しみも幾歳月(泉満子).....	12月	60
真実の教会を求めて(森越いづみ).....	12月	64

☆職業と信仰シリーズ

信仰を確立させるために(藤井利広).....	1月	176
「われは汝らを世の塩の ごとき者とす」(鈴木茂).....	2月	74

仕事を通して私が出たこと(早川則子).....	3月	64
末日聖徒の教師としてできること(誌上座談会).....	4月	50
「すべての事について感謝しなさい」 (水野裕夫).....	6月	60
人はどこから来てどこへ行くのだろうか (上地澄江).....	6月	62
末日聖徒と芸能界(小金澤篤子).....	7月	54
「信仰と研究」と私(渡辺明).....	9月	60
安息日との闘い(安藤互).....	10月	74
会社の閉鎖と教会での責任(大坂漸).....	11月	69
世界旅行で体得した福音の原則(長妻龍哉).....	12月	62

☆読者のひろば・編集室から

1月178, 2月78, 11月72	
「什分の一に関して思う四つの事柄」を読んで.....	1月 181
教会機関誌(英文)の購読について.....	10月 80

☆新刊紹介

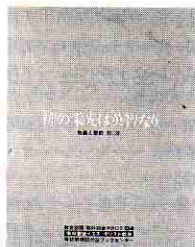
2月77, 3月63, 4月表3, 5月80, 12月72

1984年度用資料・新刊紹介

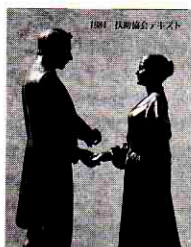
- 福音の教義(日本)福音の原則(既刊).....100円
- 初等協会「ひかり」(視覚資料付).....1200円
- 会員伝道クラス(個人学習用資料).....100円
- 会員伝道クラス(教師用テキスト).....200円
- 扶助協会教師用引き.....300円
- 聖餐会での子供の発表
「あなたの子らは大いに栄える」.....50円

☛新刊の1984年度用資料・教材ならびに渋谷ブックセンターで扱っている生物について、詳しくは「教会書籍・教材総合カタログ'84」に記載していますので、そちらを参照してください。

☛また、ご注文される方はカタログの「ご注文のしおり」をお読みになり、渋谷ブックセンター指定の注文用紙でお申し込みください。



教会書籍・教材総合
カタログ'84
A4変 48頁
限定品



1984扶助協会
テキスト
A4変 212頁
500円



家庭のタペ
イデア集
A4変 360頁
1000円



メルケゼテフ神
権定員会用
個人学習ガイド
「キリストのみ
もとにきて」
A5変 247頁
500円

モルモネード

絶食は、
ただの
白いキャンバス。
断食は、
そこに
モナリザを
描くこと。

絶食は、断食の
一部にすぎません。
本当の断食には、
祈り、勉強、靈感、
喜び、霊的な
交通などが
必要です。
あなたの断食は
どうですか？



「さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。

御使は言った、『恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなた方に伝える。

きょうダビテの町に、あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

『あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである。』

するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒にになって神をさんびして言った、

『いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように。』

御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは『さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか』と、互に語り合った。

そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。』

（ルカ2：8-16）

